

松江市文化財調査報告書第53集



文化財愛護
シンボルマーク

上浜弓1号墳他発掘調査報告書

1993年3月

松江市教育委員会



直 刀

鐵 剑

上浜弓1号墳出土鉄製品

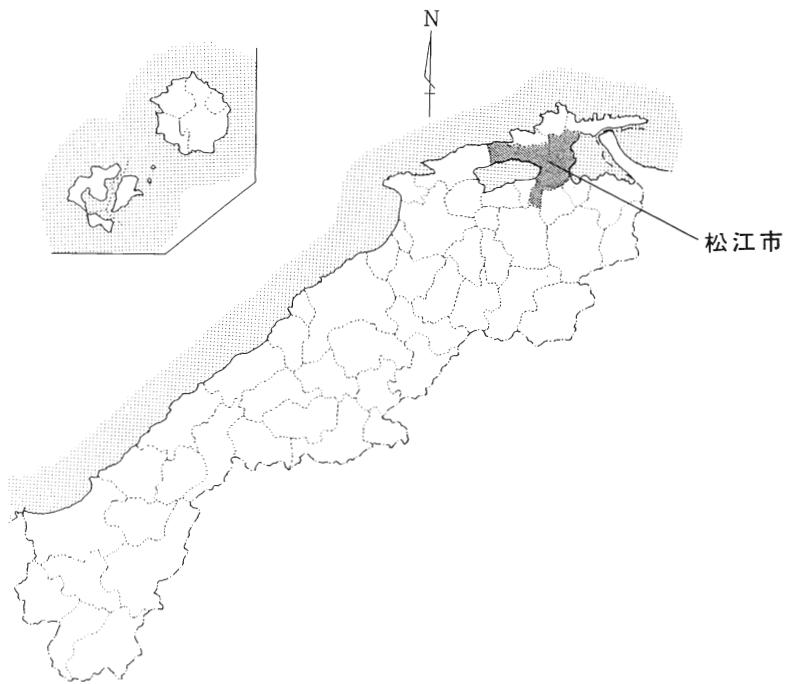
例　　言

1. 本書は、平成4年度において松江市教育委員会が実施した上浜弓1号墳他発掘調査にかかる報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社不動企業からの受託事業として、平成4年5月25日から平成4年8月31日にかけて実施した。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

委託者	株式会社不動企業	代表取締役	田中 宣二
受託者	松江市代表者	松江市長	石倉 孝昭
主体者	松江市教育委員会	教育長	諏訪 秀富
		生涯学習部長	松尾 光浩
		文化課長	中西 宏次
		文化財係長	岡崎雄二郎
調査者		同 主事	飯塚 康行
		同 級別員	山尾 絹江

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

調査指導	山本 清（島根大学名誉教授）、角田 徳幸（島根県教育委員会文化課文化財係主事）、西尾 克己（島根県立埋蔵文化財調査センター調査第3係長）、柳浦 俊一（島根県立埋蔵文化財調査センター第4調査係主任）、平野 芳英（島根県立八雲立つ風土記の丘学芸主任）
調査協力	田中 宣二（株式会社不動企業代表取締役）、金村 司（同常務取締役）
5. 出土人骨の鑑定については、鳥取大学医学部法医学教室助教授井上晃孝氏に依頼し、原稿を頂いて掲載した。
6. 出土刀剣類のX線写真撮影については、島根医科大学診療放射線課技師長君野勝治氏に依頼し、掲載した。
7. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
8. 本書の編集及び執筆、図面の浄書等は飯塚、山尾がこれを行った。



第1図 位置図



第2図 上浜弓1号墳位置図

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 周辺の歴史的環境	1
3. 調査の概要	5
(1) 1号墳の調査	5
(2) 9号墳の調査	16
(3) T-1~T-4	21
(4) 古墓状遺構	22
上浜弓1号墳関連の近世の土壙墓からの出土火葬骨について	31
4. 小 結	38

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗^{とつ}、すなわち斗^{とつ}と栱^{くびき}の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

1. 調査に至る経緯

本古墳群は松江市街地北東方向、国立島根大学裏の低丘陵上に立地する古墳である。本古墳群を含む周辺丘陵一帯の古墳の分布が知られたのは、昭和42年において島根大学考古学研究会が踏査した結果による。^(註1)

平成3年度、本古墳群の存在する丘陵を含む区域において株式会社不動企業が住宅団地の造成を計画した際に埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。分布調査の結果、計画区域内に上浜弓1号墳、浜弓1号墳が存在することが明らかとなり、協議の結果、浜弓1号墳については開発区域から外すこととなったが、上浜弓1号墳については現状保存が困難であったため、平成4年度において発掘調査を実施することとなった。また、A地点において古墳状のマウンド1ヶ所と、B地点において古墓状のマウンド2ヶ所を発見し、併せて試掘調査を実施することとなった。

2. 周辺の歴史的環境

上浜弓1号墳は松江市西川津町に所在する。

本古墳群の存在する丘陵は、松江市街地北東方向、朝酌川西側に南北に伸びる低丘陵である。本丘陵を含む朝酌川流域では、古くは縄文時代からの遺跡が多く知られ、特に古墳時代中期の古墳の密集地帯として注目されている。

縄文時代の遺跡としては、西川津遺跡（33・34）、原の前遺跡（37）、タテチョウ遺跡（38）が知られている。これらの遺跡には、度重なる朝酌川の氾濫により上流から押し流された縄文～中世にかけての遺物が堆積しており、朝酌川流域で人々の豊かな生活の営みがあったことを物語っているが、この中で縄文時代の遺物としては、前期～晚期にかけての土器や石器が発見されており、この頃から人々のくらしがあったことが窺える。それに伴う遺構が発見されていないことが惜しまれるが、昭和38年の宅地造成工事に伴って発掘調査された金崎古墳群第11号墳（19）の墳丘下から晩期の深鉢形土器が発見されており、このような日当りのよい低丘陵上に生活を営んでいたであろうと推定されている。

弥生時代に入っても住居跡、墳墓等の遺跡は明かでないが、先の西川津遺跡、原の前遺跡、タテチョウ遺跡をはじめ、朝酌川流域平野部および丘陵上の遺跡から土器類が発見されており、縄文時代から引き続き人々の生活の営みが想像される。

古墳時代に入ると、朝酌川流域の低丘陵上には大小の古墳が多数築造され、特に中期の古墳の多いことが注目される。大規模なものでは、大源古墳（30）（径37m、高さ5.3m）、宮垣2号墳（29）（径30m、高さ5m）から、小規模なものでは一辺10m前後の方墳などがある。これらの中で須恵器出現以前のものと考えられるものは、菅田丘古墳（20）、山崎古墳（39）などがあり、須恵器出現以後山本編年Ⅰ期のものとしては、薬師山古墳（21）、金崎1号墳（9）、同Ⅱ期のものとしては金崎11号墳（19）などがある。これらの古墳からは豊富な玉類、鉄製品が発見されており、本地域での豊かな生活と、農業生産力の向上による安定した経済基盤を背景とした有力者の存在が窺われるほか、これらの古墳から発見された須恵器は、出雲地方の須恵器を編年する上の貴重な指標となるものである。また、同時期の集落跡としては、堤廻遺跡（60）が知られている。昭和58年の発掘調査の結果、標高20～30mの丘陵上に古墳時代中期の住居跡14棟、掘立柱建物跡2棟の他、多数の須恵器、土師器が検出され、当時の生活の一端が窺われる。

このように古墳時代の中期までは現在の西川津町を中心とした地域で古墳が集中的に築造されているものの、古墳時代の後期に入るとその中心は北東方向（朝酌川上流域）に移り、東持田町～本庄町にかけて横穴式石室を持つ古墳が多く見られる。それらの中で最も規模の大きいものとしては、2基の横穴式石室を持つ坂本町の薄井原古墳（前方後方墳、全長50m）があり、同地域の首長墓的存在である。また東持田町の太田地区に見られるような山陰地方特有の石棺式石室をもつ古墳群など、文化の多様化をあらわしている。

（註1） 実道正年：島根大学敷地裏丘陵の古墳群について（「菅田考古第11号」昭和44年3月、島根大学考古学研究室）



第3図 周辺遺跡分布図

上浜弓1号墳周辺遺跡分布図一覧表			
No.	名 称	所 在 地	種 別
1	上浜弓1号墳	松江市菅田町	古 墳
2	上浜弓9号墳	"	方 墳
3	宮田1号墳(鶴16號)	"	方 墳
4	宮田2号墳(鶴17號)	"	方 墳
5	浜弓1号墳(鶴18號)	"	方 墳
6	菅田19号墳	"	方 墳
7	菅田20号墳	"	方 墳
8	小丸山古墳	"	古 墳
9	金崎1号墳	松江市西川津町	古 墳
10	金崎2号墳	"	方 墳
11	金崎3号墳	"	方 墳
12	金崎4号墳	"	方 墳
13	金崎5号墳	"	前方後方墳
14	金崎6号墳	"	方 墳
15	金崎7号墳	"	方 墳
16	金崎8号墳	"	方 墳
17	金崎9号墳	"	方 墳
18	金崎10号墳	"	方 墳
19	金崎11号墳	"	方 墳
20	菅田丘古墳	松江市菅田町	古 墳
21	薊師山古墳	"	墳形不明、箱式石棺?、鏡、刀身、鐵鎌、有孔円板、土師器、須恵器
22	福山1号墳	松江市西川津町	古 墳
23	福山2号墳	"	方 墳
24	福山3号墳	"	方 墳
25	深町1号墳	"	古 墳
26	深町2号墳	"	円 墳
27	深町横穴	"	横 穴
28	"	"	須恵器壺蓋、広口壺、大甕片
29	宮垣古墳群	松江市西持田町	古 墳
30	大源古墳	"	円 墳
31	"	"	方 墳5基、円 墳1基、須恵器
32	島大構内遺跡	松江市西川津町	散布地
33	西川津貝塚遺跡	"	土師器片、弥生土器片、石斧、石錐
34	西川津弥生遺跡	"	弥生土器、石斧、石錐
35	"	"	古 墳群
36	馬込山古墳群	"	方 墳3基、円 墳1基、古墓1基
37	原の前遺跡	松江市菅田町	散布地
38	タテチヨウ遺跡	松江市西川津町	縄文～平安、古墳2基
39	山崎古墳	"	縄文～弥生、土師器、須恵器
40	柴古墳群	"	古 墳
41	橋本遺跡	"	古 墳群
42	貝崎遺跡	松江市上東川津町	散布地
43	"	"	土師器片
44	"	"	弥生土器、石斧
45	"	"	古 墳
46	"	"	方 墳15×10m
47	"	"	方 墳10×10m
48	"	"	方 墳15×15m
49	中尾古墳	"	方 墳10×8m
50	貝崎古墳群	"	方 墳15×15m
51	"	松江市西川津町	古 墳
52	川津第11号墳	松江市上東川津町	古 墳
53	川津第12号墳	"	方 墳10×10m
54	"	"	方 墳10×8m
55	"	"	散布地
56	堂頭山城跡	松江市西川津町	城 跡
57	川津城跡	"	城 跡
58	柴遺跡	"	散布地
59	"	"	集落跡
60	堤廻遺跡	"	住居跡17、堀立柱建物2、土師器・須恵器片
61	"	"	古 墳
62	城跡	"	戰国時代
63	貝崎古墳	"	古 墳

0 500 m 1 km

3. 調査の概要

(1) 1号墳の調査

1号墳は、東方にのびる低丘陵の突端上に立地する東西15m、南北17m（調査前）を測る方墳である。東西南北にあわせて土層観察用の畦を設定して地山面まで掘り下げた。

ア. 墳丘について

調査の結果、東西16m、南北19m、墳裾からの比高2mを測る略長方形の古墳であることがわかった。

墳丘の築造方法は、旧地山面の周囲を削り、16m×19mの長方形の墳丘基盤を形成し、旧地表上に盛土を施して整形し、墳頂部に8m×8mの平坦面をつくる。最大盛土高は90cmを測る。盛土は地山整形時の排土を利用したものと考えられ、土色、土質ともに似ているが、第8層については旧表土に似た黒灰色の土を盛土として利用している。なお、周濠は検出されなかった。

古墳盛土中において遺物は全く検出されなかった。旧表土上面において弥生時代中期の甕片（№5）が1片検出されたが、古墳築造以前のものである。

イ. 主体部について

墳丘中心部分の盛土第3層を除去した段階で、主軸を東西におく長さ230cm、幅20cmの浅い堀り込みが検出され、東端部分では古墳時代中期の土師器の高杯片が2個体分（№3, 4）検出された（上部検出面）。

さらに第3層下部において、上部検出面と主軸を同じくする長さ235cm、幅32～40cmを測る深さ8cmの墓壙が検出され、墓壙南辺で直刀1（№2）、北辺で鉄剣1（№1）が検出された。いずれも切先を西方に向けており、頭位が東方にあったことが窺われる（下部検出面）。

これらの堀り込みは同じ層中に存在し、同じ主軸方位を取ることから、本来同一の墓壙であり、棺内に直刀と鉄剣を副葬し、棺上に土師器高杯を供献した木棺直葬の主体部であったものと推定される。

ウ. 出土遺物について

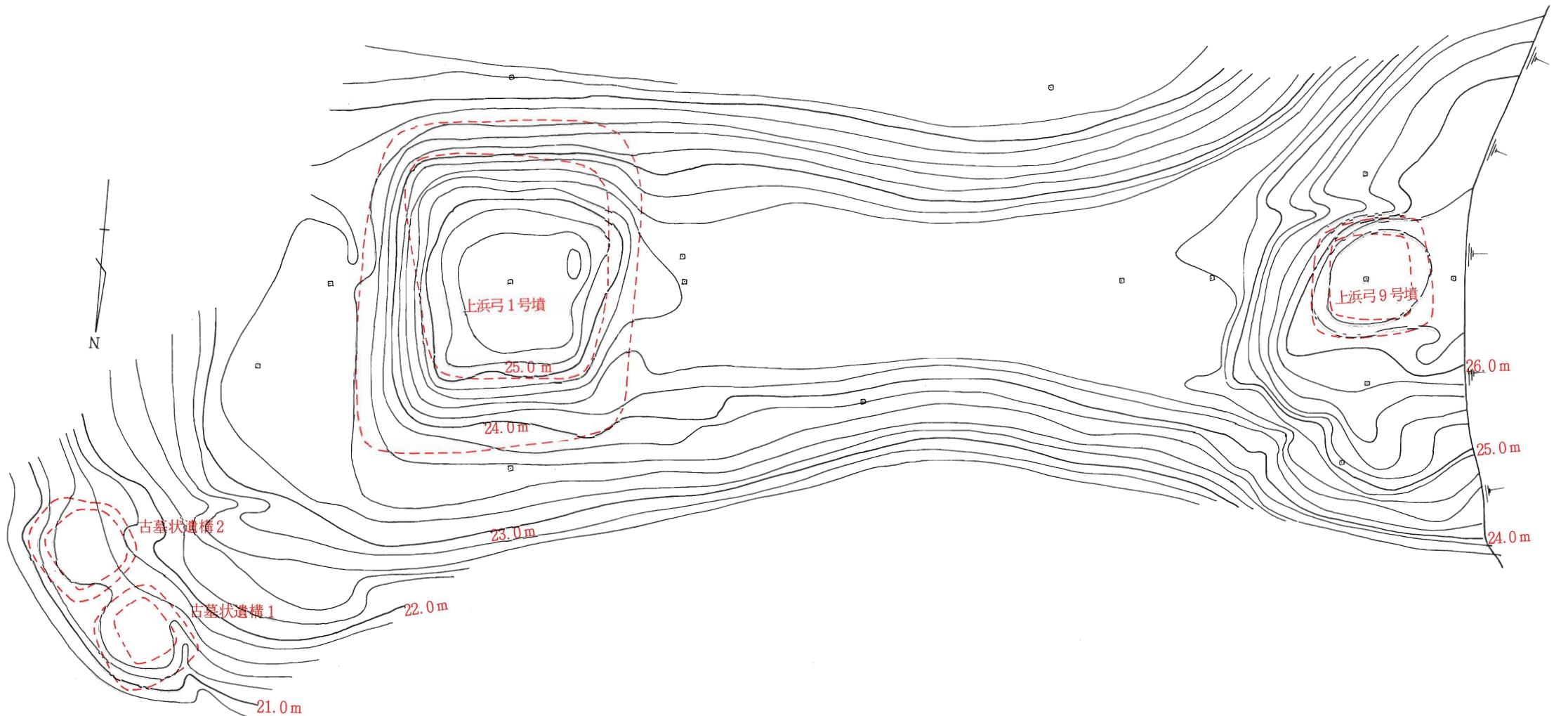
№1は1号墳主体部下部検出面から出土した両刃の鉄剣である。全長40.6cm, 刀身長29.0cm, 茎長11.6cm, 最大刃幅2.6cm, 最大刃厚0.6cmを測る。切先及び刀身側面部に一部木片が残っており、副葬時には木の鞘に収められていたものと考えられる。目釘穴は茎尻から5.8cmの位置に1箇所見られ、径3mmを測る。

№2は1号墳主体部下部検出面から出土した鉄製の直刀である。全長80.2cm, 刀身長62.0cm, 茎長18.2cm, 最大刃幅3.9cm, 最大刃厚0.8cmを測る。X線写真撮影の結果、関部の形態としては両関の可能性が考えられ、目釘穴は茎尻から5cmと11.3cmの位置に2箇所見られ、径約8mmを測る。

№3は1号墳主体部上部検出面で出土した土師器の高坏底部片である。風化が著しく、調整等は不明である。

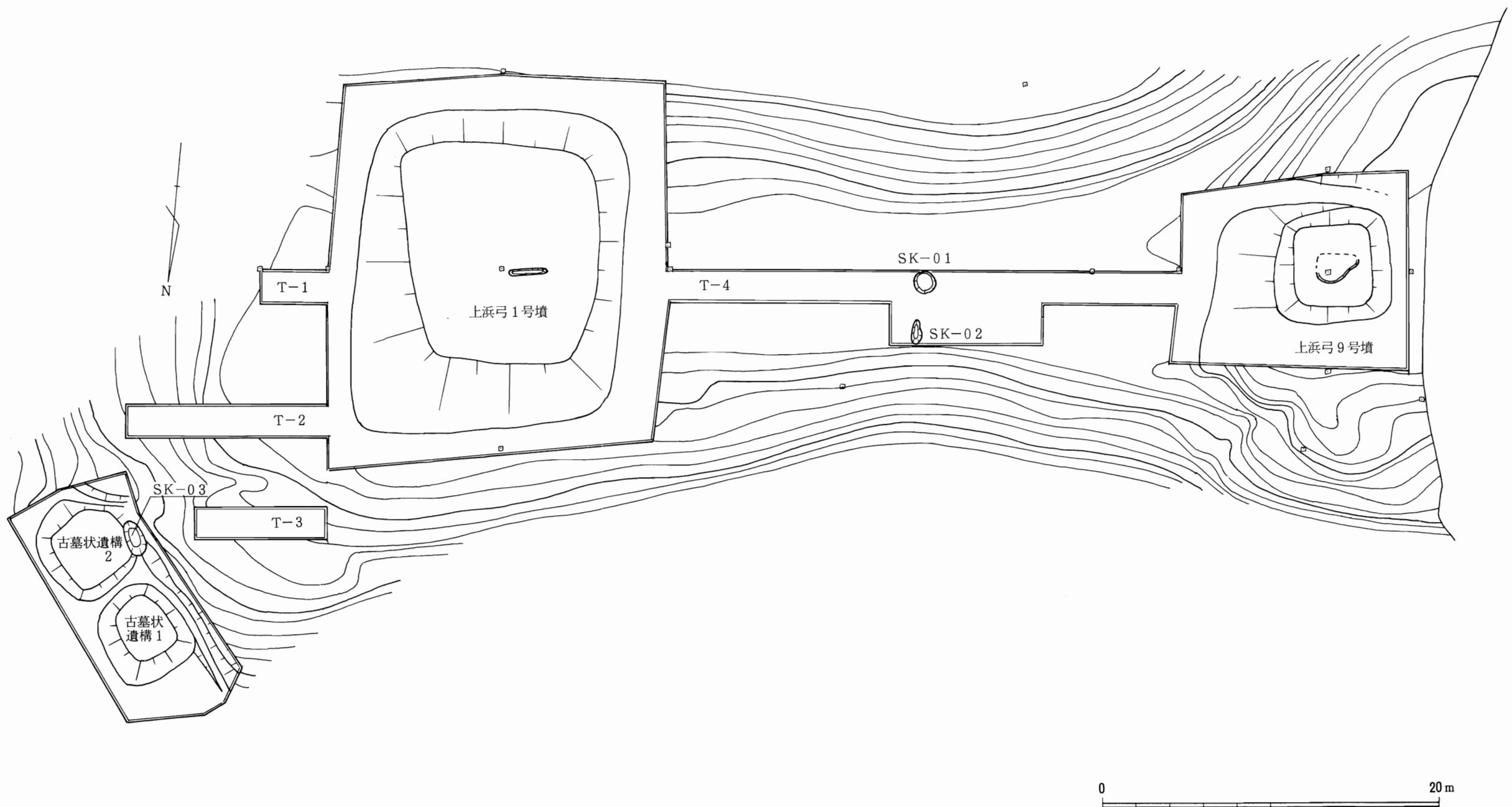
№4は1号墳主体部上部検出面で出土した土師器の高坏であり、脚部径で「ハ」字に屈曲して開く。風化が著しいが、坏底部外面に一部ハケ目が残っている。

№5は1号墳の盛土を除去した際に旧表土上面で検出された弥生時代中期の甕片である。口縁部は「く」字状に折れ、端部が肥厚して上下に拡張するもので、外面に凹線文が巡らされる。風化が著しいが、肩部外面に一部ハケ目が残る。



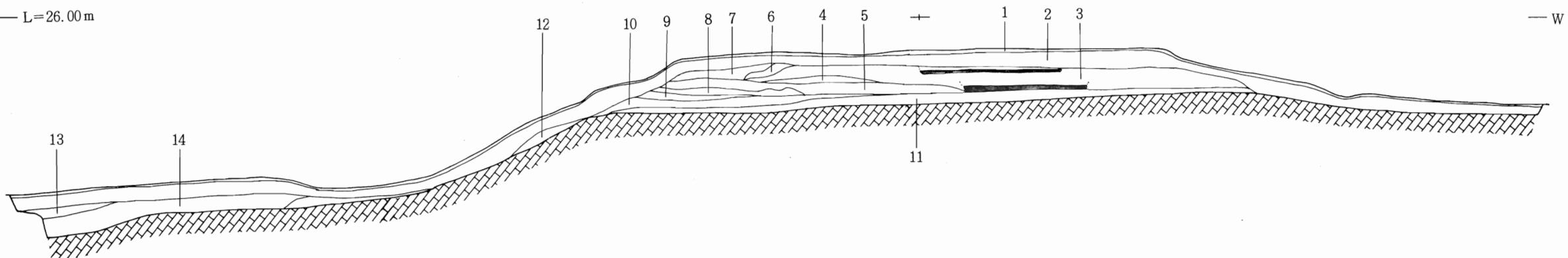
第4図 調査前地形測量図 ($S = 1/300$)





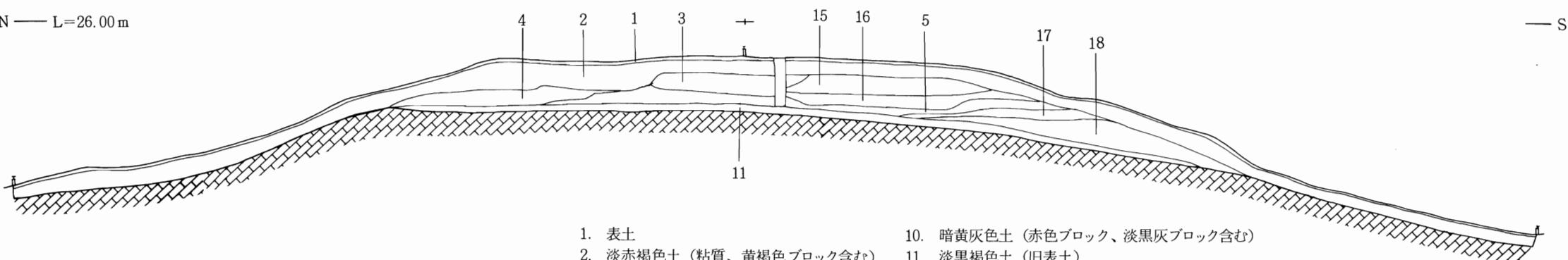
第5図 調査後平面図 ($S = 1/300$)

E — L=26.00 m



— W

N — L=26.00 m



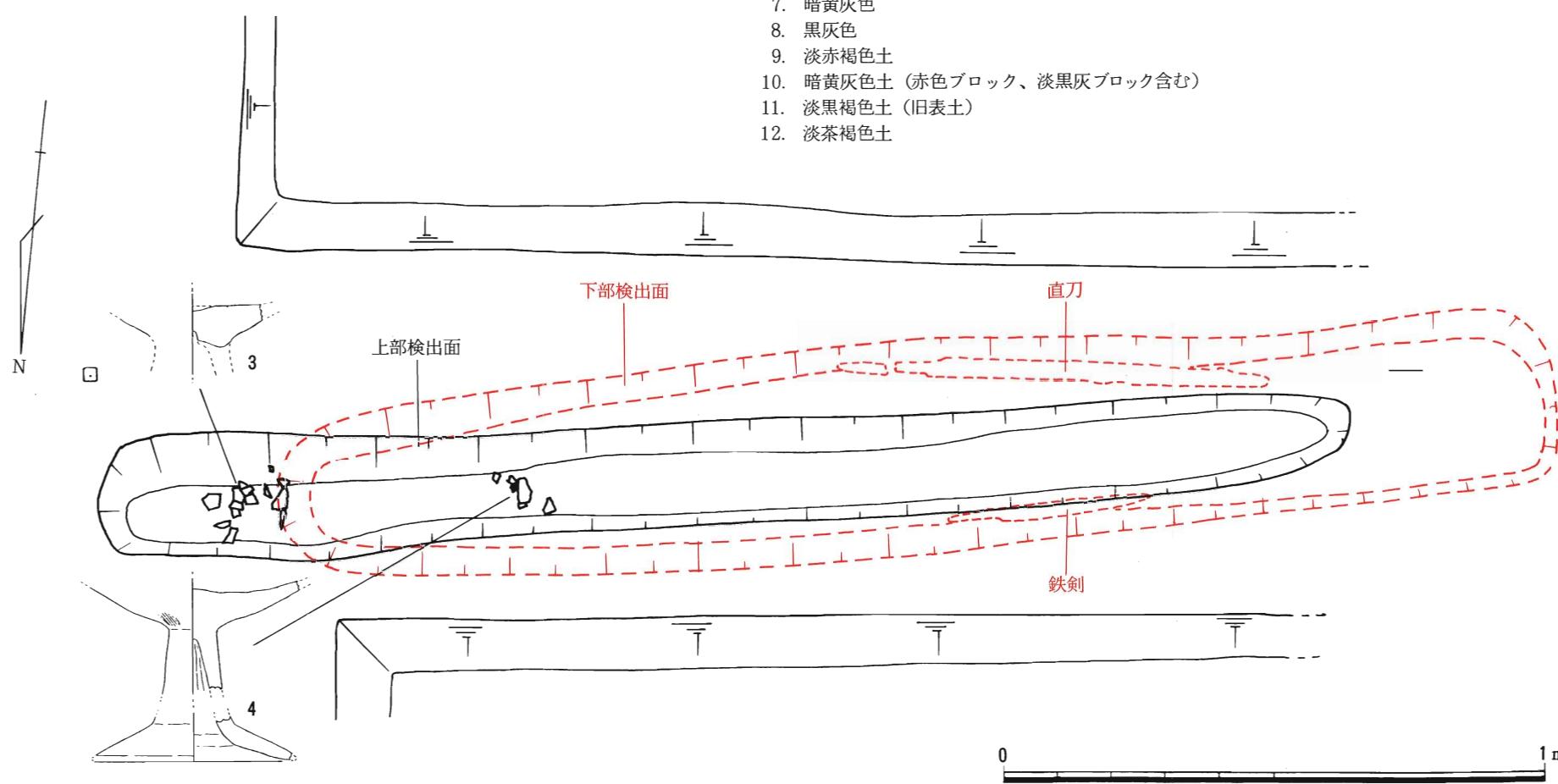
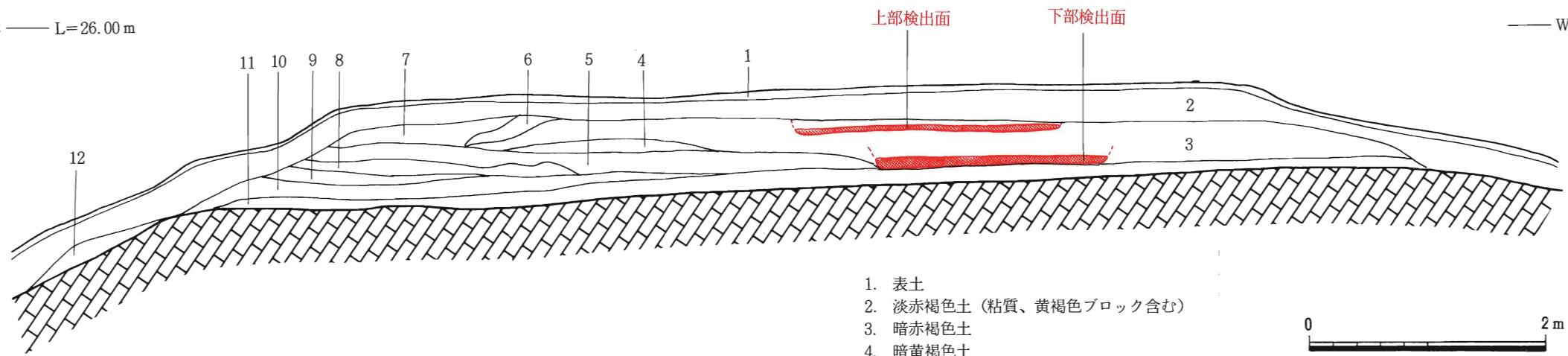
— S

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 1. 表土 | 10. 暗黄灰色土 (赤色ブロック、淡黒灰ブロック含む) |
| 2. 淡赤褐色土 (粘質、黄褐色ブロック含む) | 11. 淡黒褐色土 (旧表土) |
| 3. 暗赤褐色土 | 12. 淡茶褐色土 |
| 4. 暗黄褐色土 | 13. 淡灰褐色土 |
| 5. 明赤褐色土 (非常に堅い、粘質) | 14. 淡黄褐色土 (粘質、堅い) |
| 6. 赤褐色土 | 15. 淡黄褐色土 (赤褐色ブロックを多く含む) |
| 7. 暗黄灰色 | 16. 明赤褐色土 (非常に堅い、粘質、5層に酷似) |
| 8. 黒灰色 | 17. 明赤褐色土 (16より少し暗い色) |
| 9. 淡赤褐色土 | 18. 暗黄灰色 (5に酷似) |



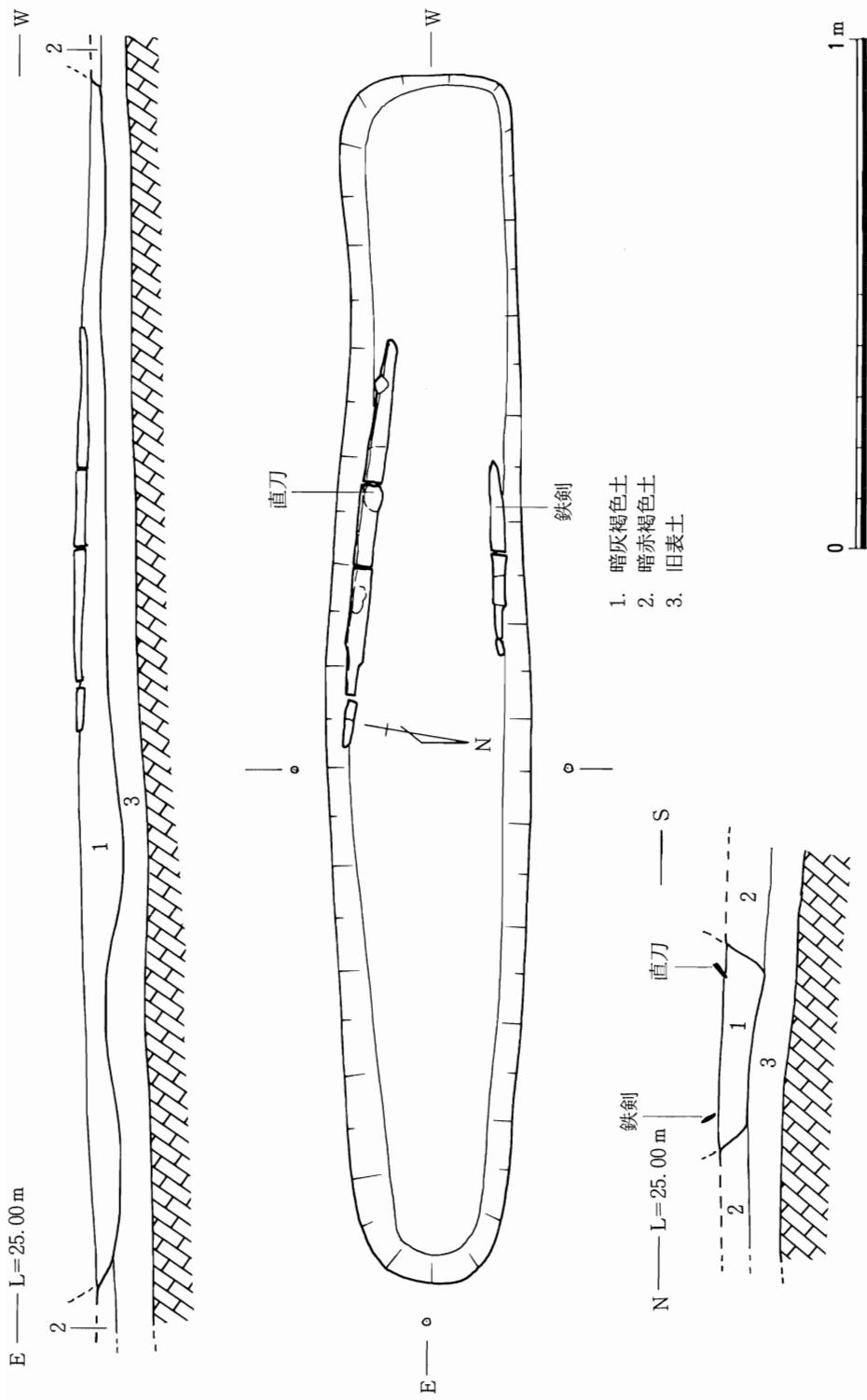
第6図 上浜弓1号墳墳丘断面図

E —— L=26.00 m



第7図 上浜弓1号墳主体部平面図

第8図 主体部下部検出面平面図



(2) 9号墳の調査（A地点）

1号墳と同じ丘陵上の西方に位置し、試掘調査の結果、一辺7.0mを測る方墳であることが判明し、発掘調査に至った。東西南北に合わせて土層観察用の畦を設定して地山面まで掘り下げた。

ア. 墳丘について

調査の結果、一辺7.0m、墳裾からの比高1.0mを測る方墳であることがわかった。

墳丘の築造方法は、旧地表面の周囲を削り、7.0m×7.0mの方形の墳丘基盤を形成し、旧地表面上に盛土を施して整形する。最大盛土高は40cmを測る。盛土は地山整形時の排土を利用したものと考えられ、土色、土質ともに地山に似ている。なお、周濠は検出されなかった。

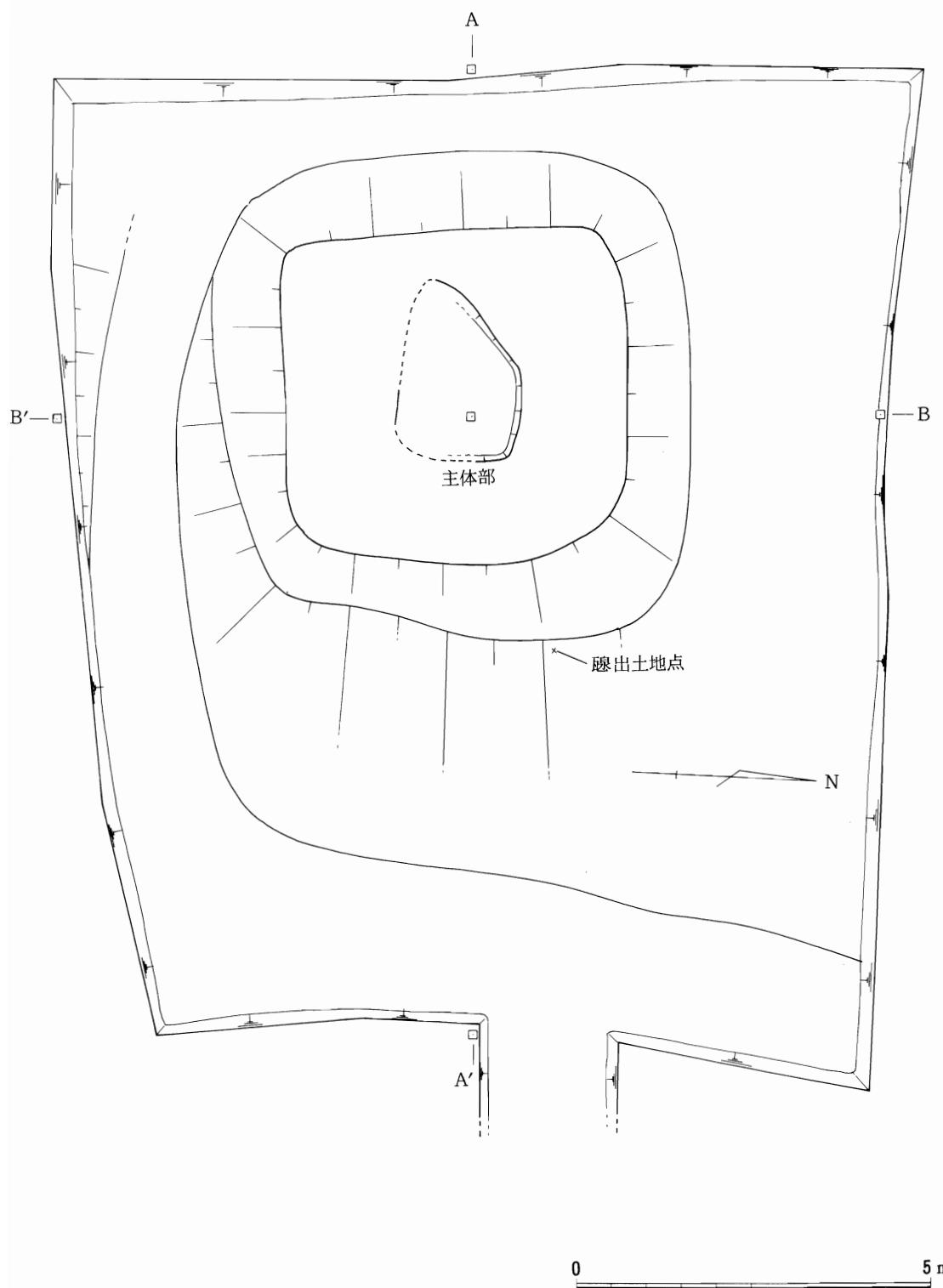
墳丘中の出土遺物としては、墳丘東斜面第11層中において須恵器の壺片（№6）1片を検出したのみである。

イ. 主体部について

墳丘中心部分において東西250cm、南北170cmを測る不整形の墓壙を検出した。主体部施設は不明であり、出土遺物も全く検出されなかった。

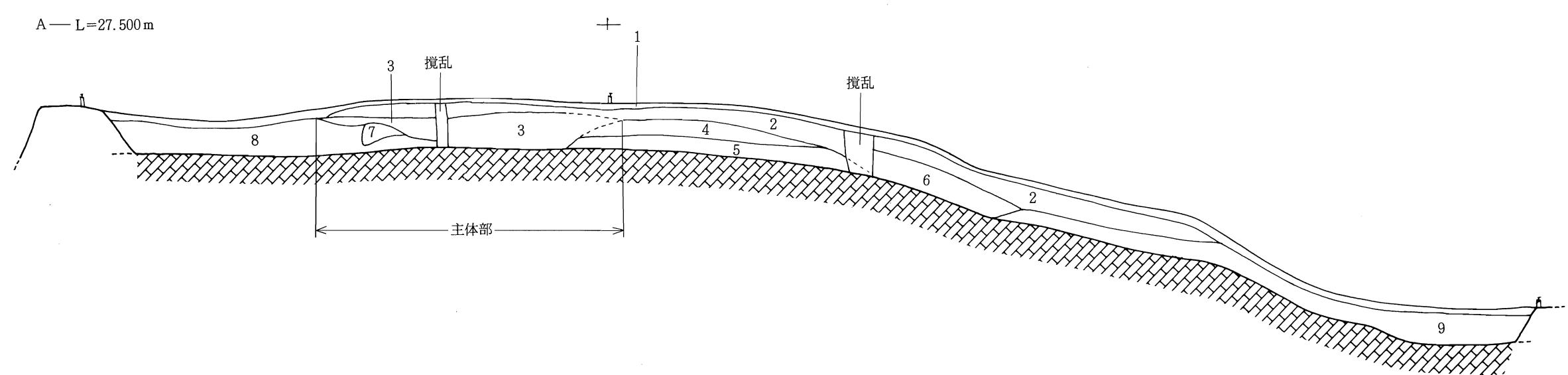
ウ. 出土遺物について

№6は9号墳墳丘東側掘削時に出土した須恵器壺の胴部である。外面にクシ状工具による波状文が巡らされている。

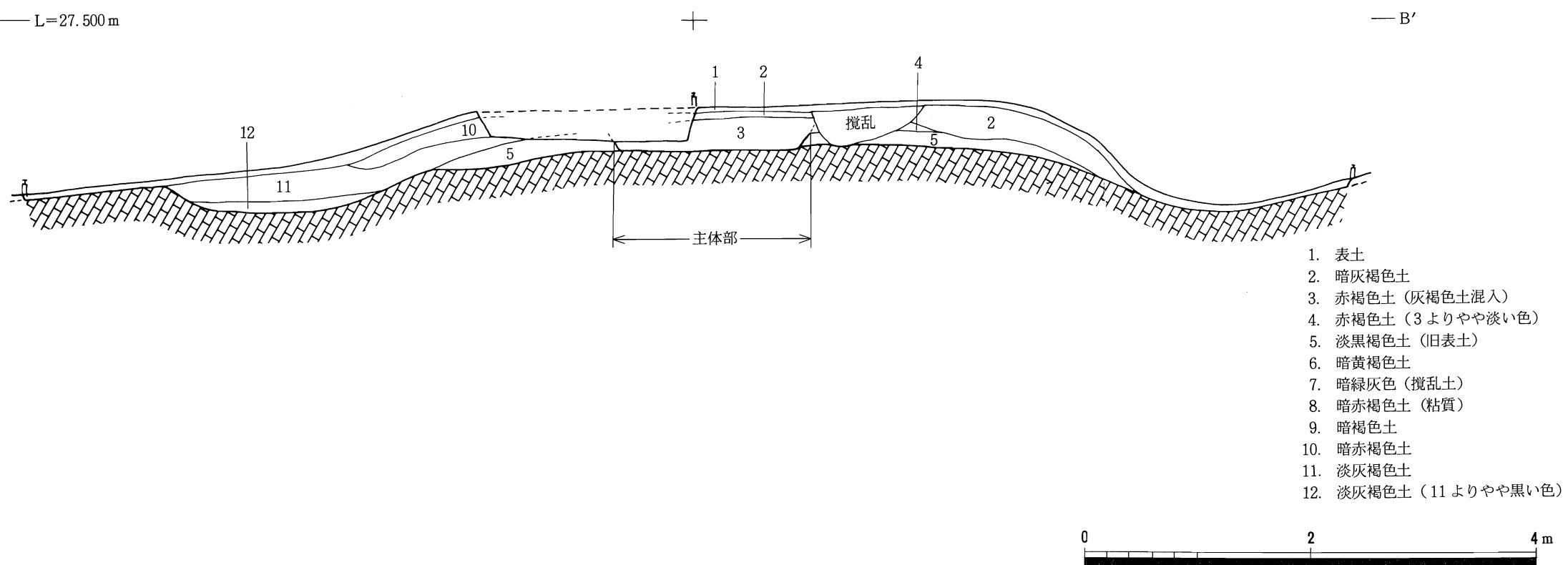


第9図 上浜弓9号墳調査後平面図

A — L=27.500 m



B — L=27.500 m



第 10 図 上浜弓 9 号墳墳丘断面図

(3) T-1～T-4

ア. T-1について

1号墳の周濠の有無を確認するために、1号墳東裾から東方へ向かって長さ5m、幅2mの規模で設定したトレンチである。地山面まで掘り下げた結果、トレンチ東端部で地山が急激に落ち込む状況が確認されたが、自然地形によるものであると考えられる。出土遺物としては、第1層中からかわらけの細片が数片出土したのみである。

イ. T-2について

1号墳と古墓状遺構の間の平坦部分において、遺構の有無を確認するために長さ12m、幅2mの規模で設定したトレンチである。地山面まで掘り下げた結果、地山面において遺構は全く検出されなかった。また、遺物も検出されなかった。

ウ. T-3について

1号墳と古墓状遺構の間の平坦部分において、遺構の有無を確認するためにT-2に平行して長さ8m、幅2mの規模で設定したトレンチである。地山面まで掘り下げた結果、地山面において遺構は全く検出されなかった。また、遺物も検出されなかった。

エ. T-4について

1号墳と9号墳の間の尾根筋上に東西に長さ30m、幅2mの規模で設定したトレンチである。地山面まで掘り下げた結果、SK-01, 02が検出された。

● SK-01

T-4で検出された近世の土壙墓である。プランはほぼ円形で、直径140cm、深さ12cmを測る。地山面に直接掘り込まれており、後世の削平により上部が失われているが、壙底においてかわらけ皿2個体（№8, 9）および破片多数、人骨と思われる骨片多数が検出された。

№8は口径11.0cm、器高2.2cmを測る。風化が著しく、調整は不明であるが、底部が平坦であるため、ろくろ成形により仕上げ、回転糸切りによって切り離したものと考えられる。

№9は口径12.8cm、器高2.5cmを測る。底部はやや上げ底気味で、外面に指頭圧痕が多数残り、内型成形によるものであると考えられる。これらはいずれも近世のかわらけ皿であるものと考えられる。

● SK-02

SK-01の北側において検出された近世の土壙墓である。南北140cm、東西65cm、深さ12cmを測

る。SK-01と同じく地山面に掘り込まれており、後世の削平により上部が失われている。墓壙中において人骨と思われる骨片多数が発見された。

(4) 古墓状遺構

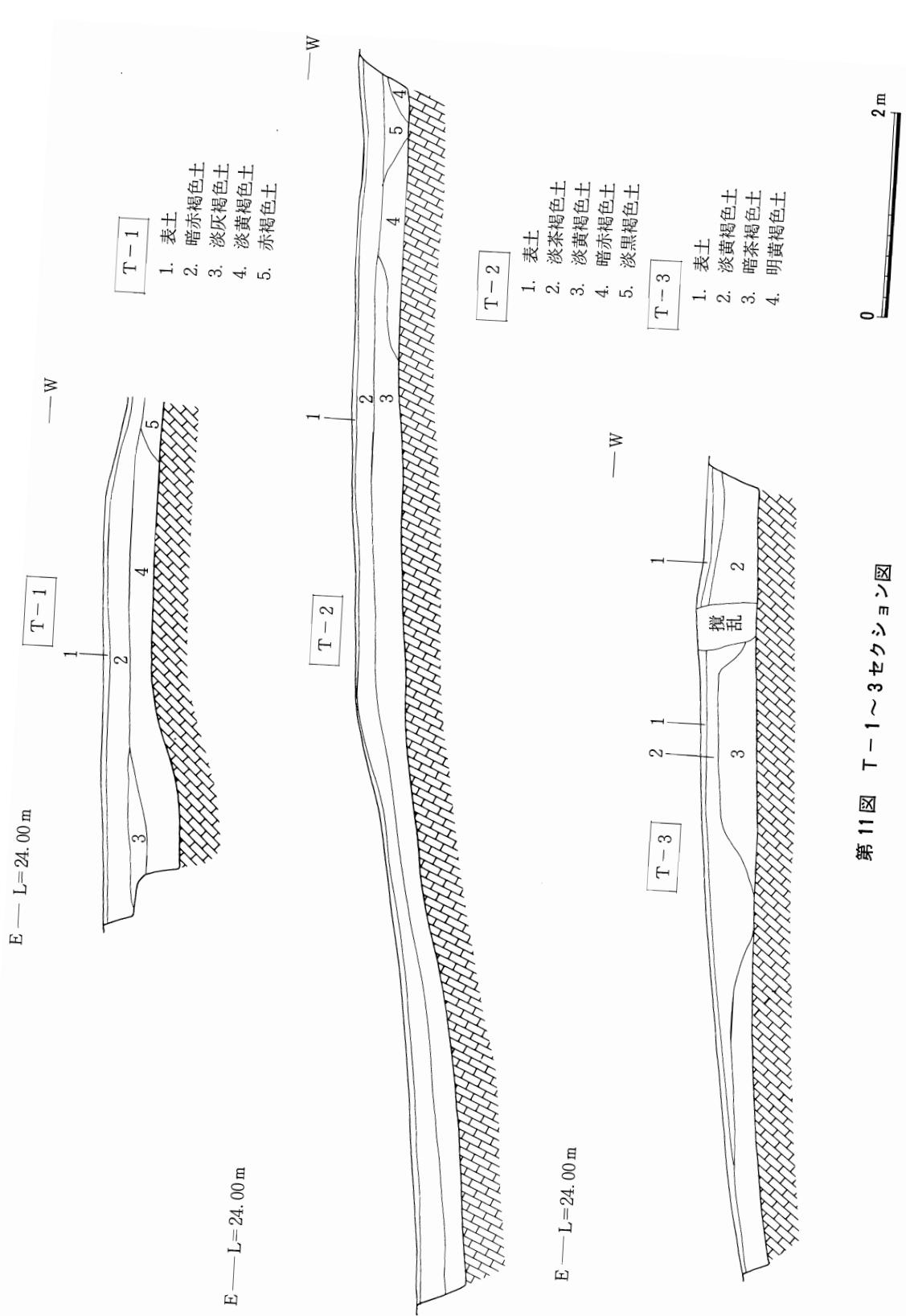
1号墳から尾根筋を北東方向に下った位置に存在する。土層観察用の畦を設定して地山面まで掘り下げた。

- 古墓状遺構 1

5.5m×5.5mを測る方形のマウンドで、最大約50cmの盛土を施す。内部主体は不明で、地山面においてかわらけの皿片（№7）を検出したのみである。№7は風化が著しく、調整が不明であるが、底部が平坦であるため、ろくろ成形により仕上げ、回転糸切りによって切り離したものと考えられる。

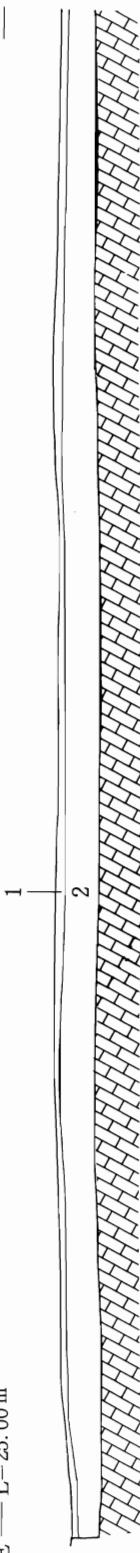
- 古墓状遺構 2

6.0m×5.5mを測る方形のマウンドで、古墓状遺構1の南側に位置する。最大約30cmの盛土を施す。内部主体は不明で、出土遺物は全く検出されなかった。また、西側裾部においてSK-03が検出されたが、出土遺物はなかった。

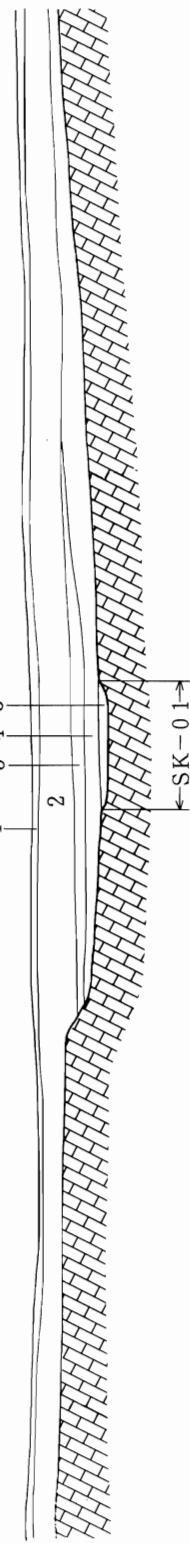


第 11 図 T-1~3 セクション図

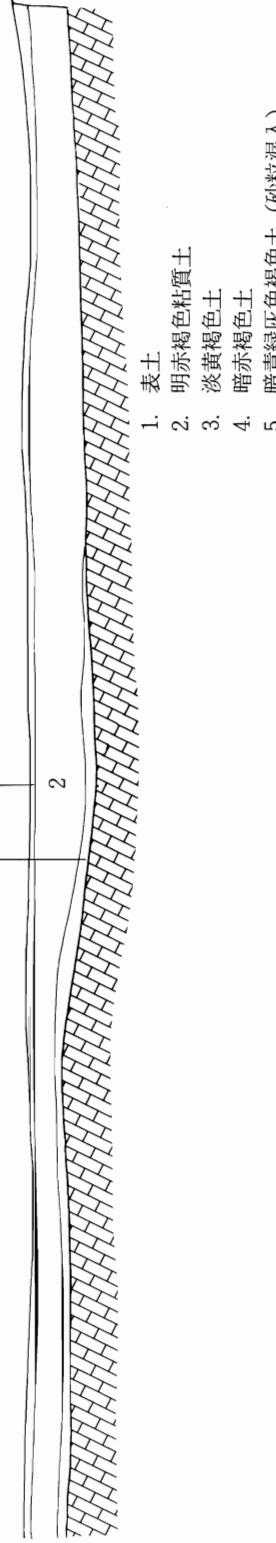
E —— L=25.00 m



— L=25.00 m

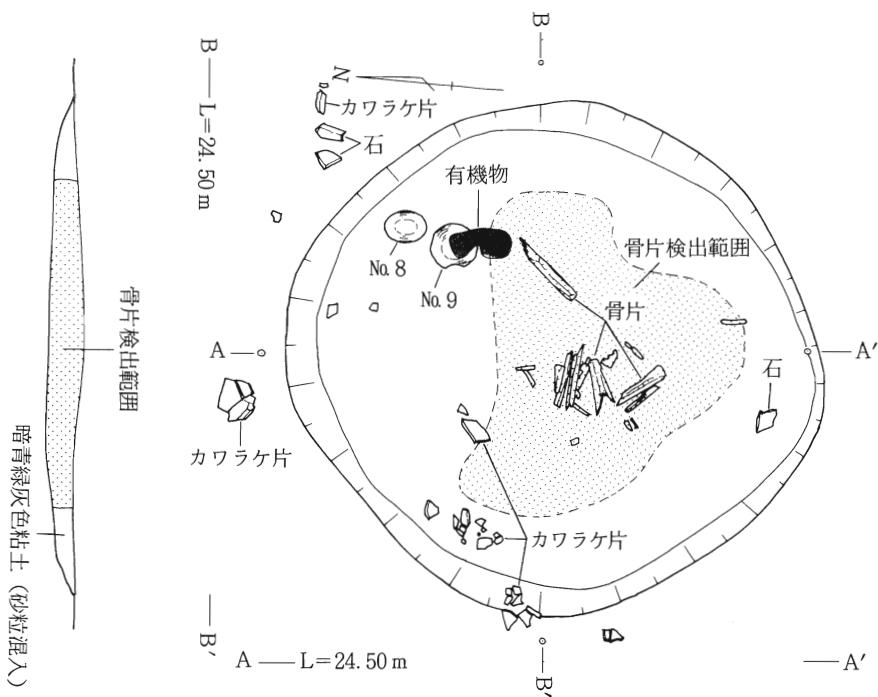


— L=25.00 m

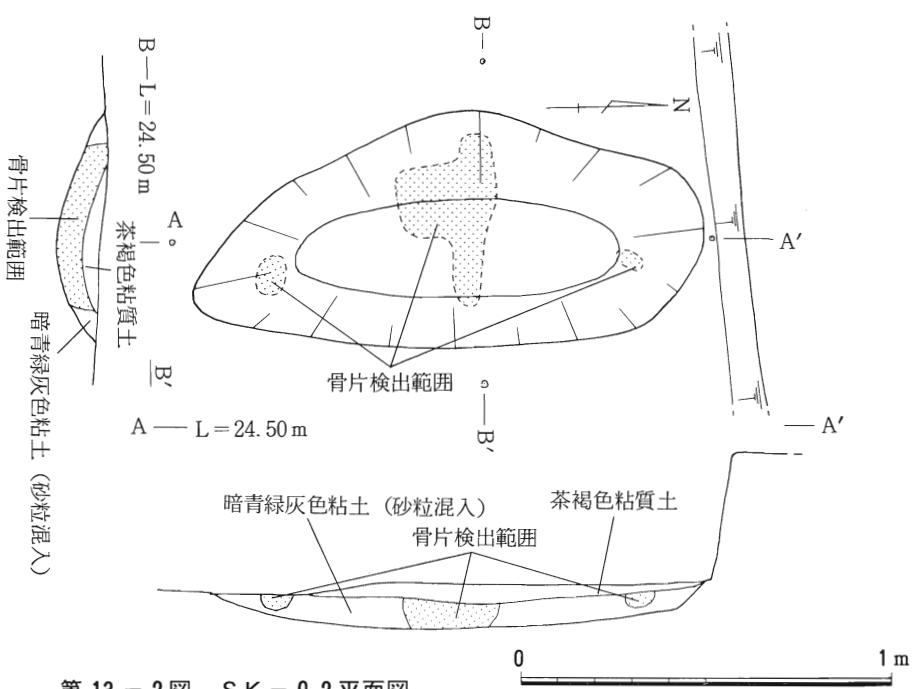


0 2 m

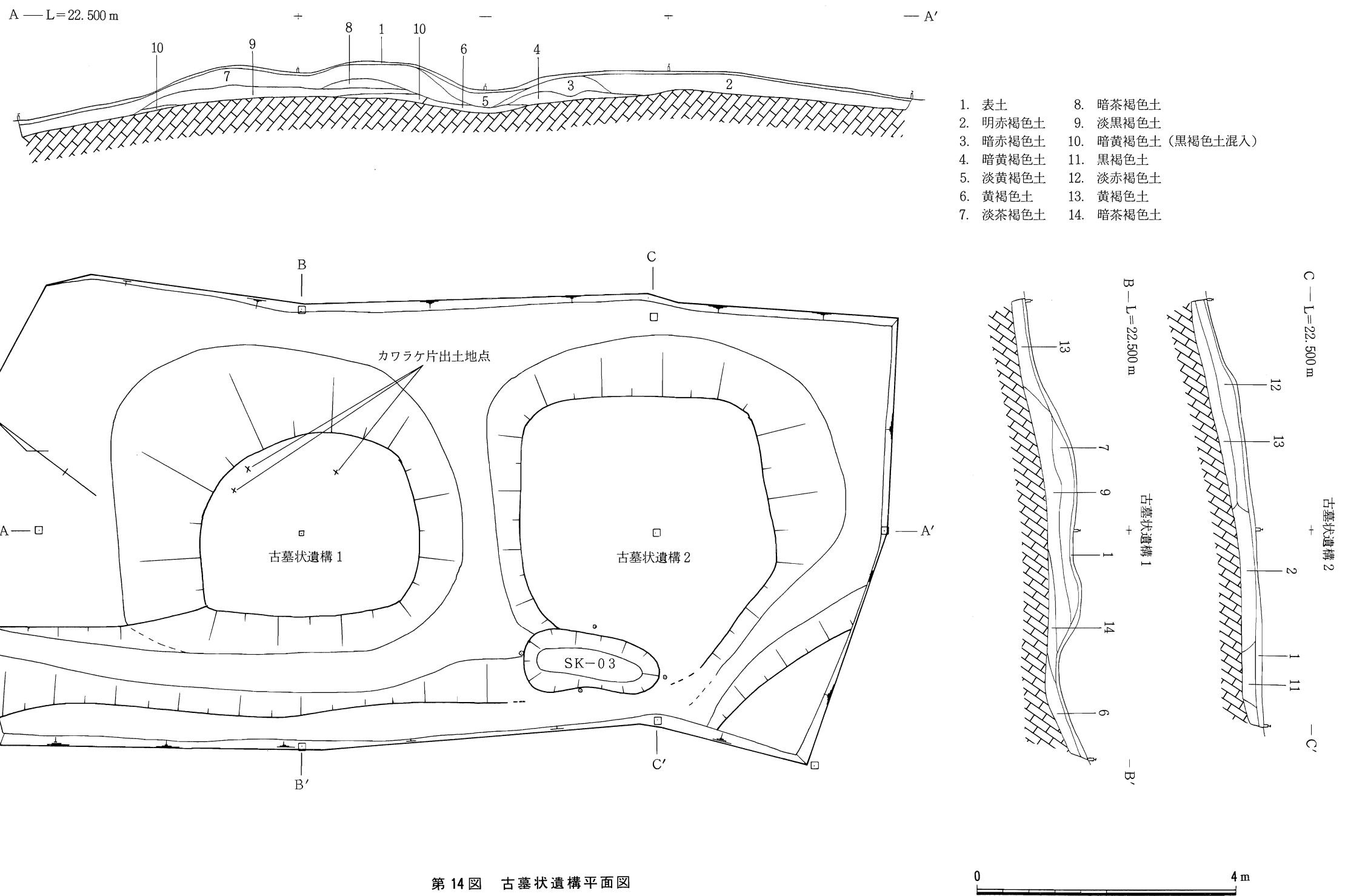
第12図 T-4セクション図



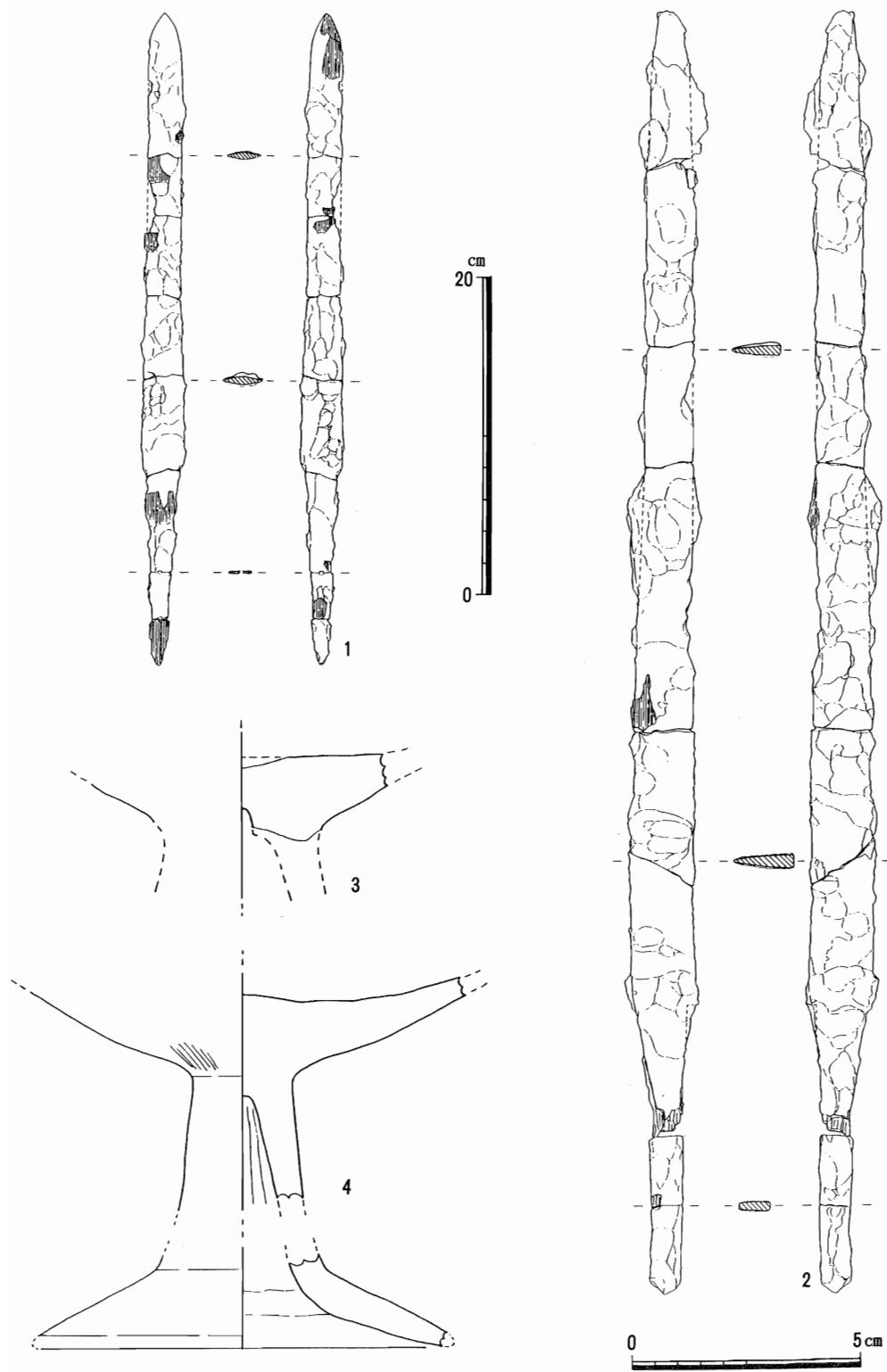
第 13-1 図 SK-01 平面図



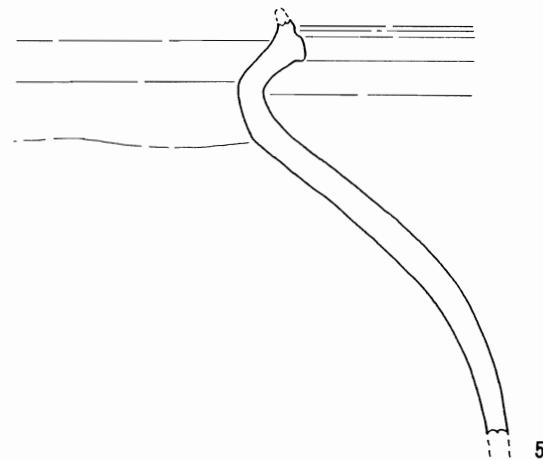
第 13-2 図 SK-02 平面図



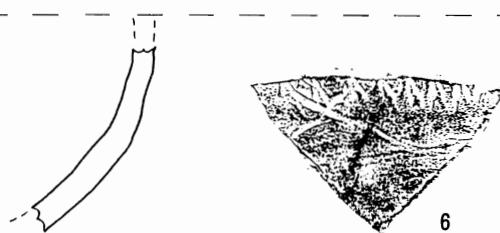
第14図 古墓状遺構平面図



第15図 上浜弓1号墳出土遺物



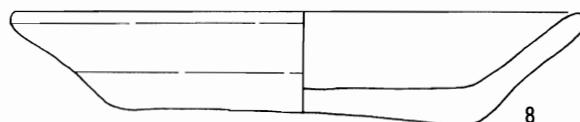
1号墳旧表面出土



9号墳墳丘盛土中出土



古墓状遺構 1 出土



8



9



第 16 図 1号墳、9号墳、出土遺物

上浜弓1号墳関連の近世の土壙墓からの出土火葬骨について

鳥取大学医学部法医学教室 井 上 晃 孝

I. はじめに

松江市西川津町字菅田地内の上浜弓1号墳関連遺跡の中に、近世の土壙墓2基（SK-01, SK-02）が検出された。その土壙墓から火葬した人骨片が出土した。

II. 火葬骨

出土火葬骨は、全般的に小骨化しているが、骨の形態学的特徴から、明らかに人骨である。

SK-01の火葬骨は、遺残骨量も多く、大半が完全焼骨に近い状態にあったが、一部の骨は黒色、炭化した不完全焼骨も含まれていた。

SK-02の火葬骨は、遺残骨量も少なく、完全焼骨のみである。

III. SK-01の火葬骨

遺残火葬骨重量は450gである。これらの火葬骨は、骨片化しており、四肢骨が大半を占め、その他部位不明の骨片多数から成る。

1) 残存骨

上肢骨：左右不明の上腕骨、橈骨片、尺骨片

下肢骨：左右不明の大腿骨片、脛骨片、腓骨片

手足骨：手足の指節骨

部位不明骨：骨片多数

2) 性別推定

本火葬骨は、すべてが骨片化しており、性的特徴を示す部位がないが、四肢骨の大きさ、厚径からして男性（?）と推定される。

3) 年齢推定

遺残する火葬骨中には、年齢を特定できる部位はないので、年齢推定は不詳である。しかし、本火葬骨をみると、骨の大きさからして成人域に達していることは確実であるが、それ以上の区別は不詳である。

4) 身長推定

本屍骨は、火葬骨で骨片化しているので、身長は不詳である。

5) 血液型

火葬骨の場合、血液型抗原物質は高温の為消失しているので、血液型は不詳である。

IV. SK-02の火葬骨

遺残火葬骨重量は60gである。これらの火葬骨は、骨片化しており、残量も少なく、ほとんどその部位を特定できない。

1) 残存骨

四肢骨片：若干

部位不明骨片：少数

2) 性別推定

本火葬骨は、すべてが小骨片化していて、性的特徴を示す部位がないので、不詳である。

3) 年齢推定

遺残する火葬骨の中には、年齢を推定できる部位がないので、年齢は不詳である。

4) 身長推定

本屍骨は、火葬骨で小骨片化しているので、身長は不詳である。

5) 血液型

SK-01と同様に火葬骨なので、血液型抗原物質が消失しているので、血液型は不詳である。

V. 考察

1. 火葬骨

完全焼骨は、700~800°Cの高温のため、焼骨は全般的に灰白色ないし白色を呈し、骨は著しく収縮し、骨の表面は長軸方向に裂開、横方向に亀裂を生じ、その裂け目に沿って崩壊、骨片化していく。^(註1)

しかるに、本火葬骨では長軸方向の裂開も少なく、横方向の亀裂も少なく、骨の捩れなどもそれほど変化が著明ではない。

SK-01の被葬者は、恐らく火葬（荼毘）に伏せられた時の薪の量が充分でなく、火葬には充足していたが、一部に不完全焼骨（炭化、黒色骨）が含まれていたので、それほど高温に至らなかった為、典型的な完全焼骨にならなかったと推察される。

2. 火葬時の遺体の状態

軟部組織に含まれている長管骨が焼けた場合、外面の深いひび割れ、横方向の輪状の亀裂、長軸方向の裂開、さらに著しい捩れなどの変化が特徴的であるという。

しかるに、白骨を焼いた時の変化は、長軸方向の裂開、表面の浅いひび割れだけにとどまり、形が歪むことはない^(註1)といふ。

本遺跡のSK-01、SK-02の火葬骨は、いずれも外面のひび割れ、横方向の亀裂、長軸方向の裂開、骨の捩れなどが中等度に認められることから、被葬者は死後まもなく火葬（荼毘）に伏されたものと推察される。

3. 被葬者の性別、年齢、身長と血液型

1) 性別推定

本火葬骨（SK-01、SK-02）は、性的特徴を示す部位がほとんど皆無なので、性別は不詳である。

がしかし、あえて言えば、SK-01の四肢骨片は、火葬骨としてもかなり大きく、がっしりしていることから、男性（？）と推定する。SK-02は遺残骨が少なく、性別を推定するには至らない。

2) 年齢推定

焼骨の場合、通常年齢推定はかなり困難である。本火葬骨では、年齢推定できる部位はほとんどない。

しかし、SK-01の火葬骨は、四肢骨のみが遺残しており、骨の大きさ、厚径からして成人域であることは一応確認できるが、それ以上の区分は不詳である。

SK-02は若干の四肢骨片が残存するが、その骨からは年齢推定には至らない。

3) 身長、血液型

火葬骨の場合、完全な四肢骨長が得られないで、SK-01、SK-02ともに身長は不詳である。

血液型判定は、通常骨、歯牙からなされるが、火葬骨の場合は高温のため、血液型抗原物質が消失してしまうので、現行の検査法では不詳である。

4) 火葬骨の異常

火葬の場合、一般的に完全焼骨では、骨は長軸方向に裂開、横方向に亀裂を生じ、その裂け目に沿って崩壊、骨片化する傾向があるが、頭骨片と四肢骨等が均一に遺残するのが通例である。

しかるに、SK-01の火葬骨の場合、骨残量は450gとかなり多く遺存するが、そのほとん

どの骨が四肢骨に限られ、遺残性の悪いとされている筈の手足の末梢の指節骨が残っているのに、頭骨片が1片も遺残していないのは、極めて異常である。

理由として、①火葬後人為的に頭骨を移動した（拾骨？），②火葬前に、すでに頭部がなった（打ち首？），いずれにしても詳細は不詳である。

4. 拾 骨

山口県下関市吉母浜遺跡の中世の火葬墓の普及は、真宗信仰と密接な関係があり、真宗門徒は火葬のあと、第2頸椎骨（ノドボトケ）を拾骨し、小さい骨壺におさめて持ち帰るという。

火葬墓のすべてにわたって、第2頸椎骨が見出されていないので、中世にすでに、第2頸椎骨の拾骨が行われていたと推定できるという。

山陰における中世の火葬墓として、自験の松江市の二反田古墓と鳥取市布勢鶴指奥の墳墓群は、ともに骨の遺残性が悪く、わずかに頭骨片と四肢骨片が残存する程度であり、脊椎骨の遺残を認めないので、拾骨があったかどうか確認に至っていない。

今後、中世と近世の火葬墓と拾骨との関係についても検討したい。

VII. ま と め

上浜弓の近世の土壙墓であるSK-01とSK-02から火葬骨が出土した。

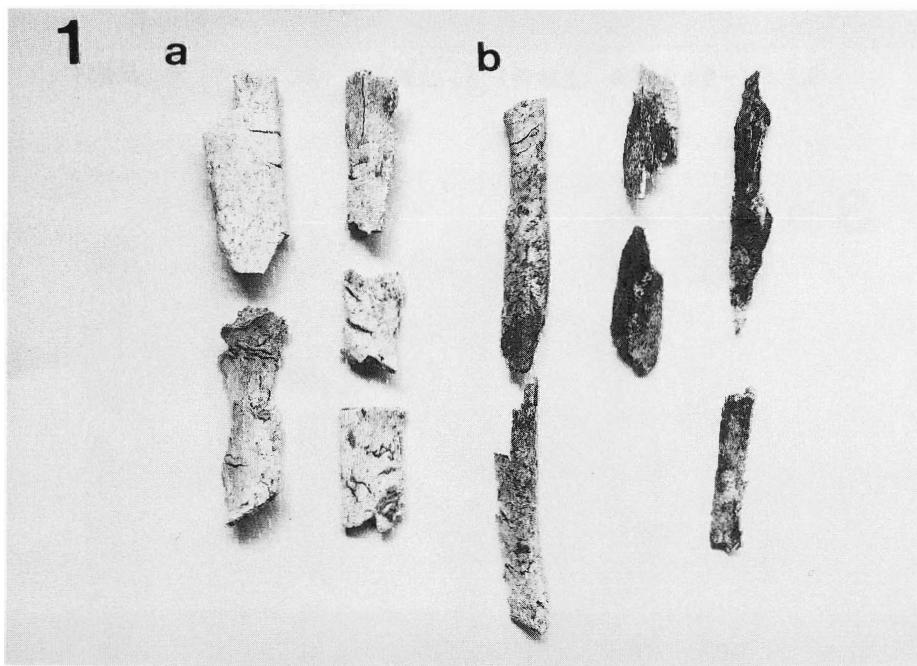
SK-01の火葬骨の被葬者は、性別は男性（？）、年齢は成人域、身長と血液型は不詳である。

SK-02の火葬骨の被葬者は、残存骨量が極めて少なく、性別、年齢、身長、血液型とともに不詳である。

これらSK-01とSK-02の被葬者は、骨の遺残状態からして、死後間もなく火葬（荼毘）に伏されたものと推察される。

参考文献

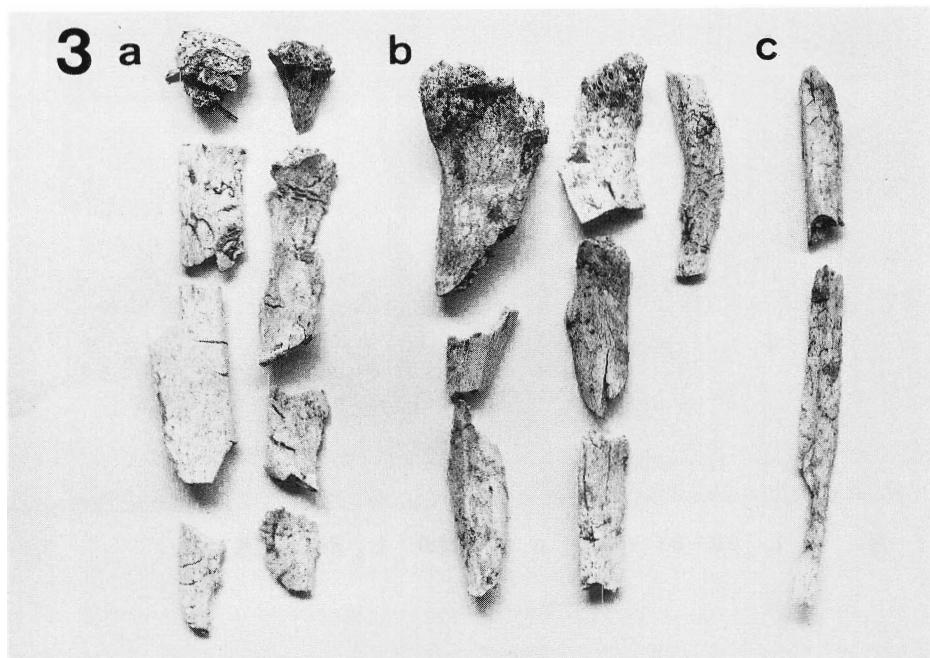
- 1) 池田次郎 (1981) : 出土火葬骨について (「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告43」大安萬呂墓, P-79~88, 奈良県立橿原考古学研究所)
- 2) 国分直一 (1985) : 吉母浜の中世墓制—特にその葬俗をめぐって (「吉母浜遺跡」P-263~270, 下関市教育委員会)
- 3) 井上晃孝 (1983) : 中竹矢遺跡火葬墓出土の人骨について (「国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」P-543~546, 島根県教育委員会)
- 4) 井上晃孝 (1992) : 布勢鶴指奥墳墓群からの出土人骨と獣骨 (「鳥取県教育文化財団調査報告書29」P-292~313, 鳥取県教育文化財団)



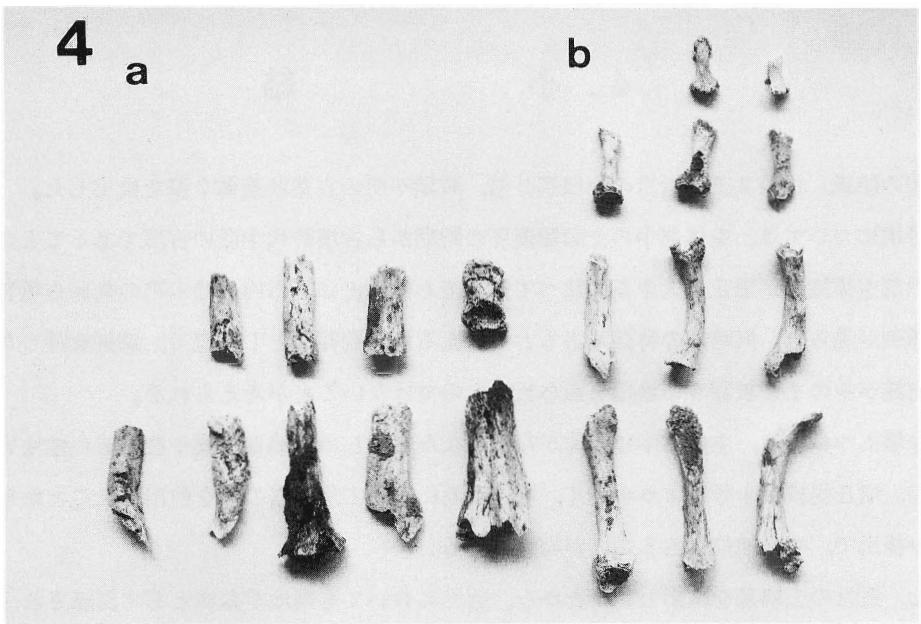
1. SK-01 火葬骨 a. 完全焼骨 b. 不完全焼骨



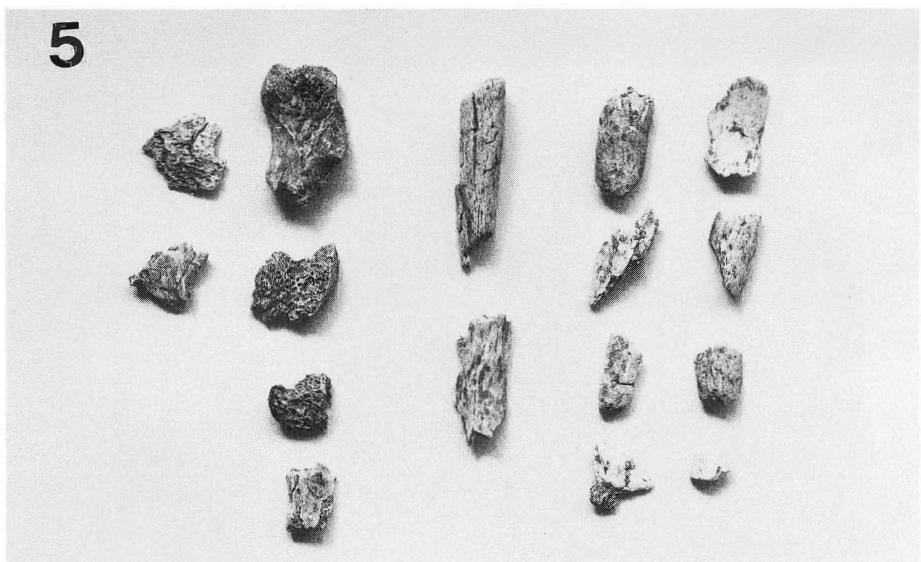
2. SK-01火葬骨（上肢骨） a. 上腕骨片 b. 桡骨片 c. 尺骨片



3. SK-01火葬骨（下肢骨） a. 大腿骨片 b. 胫骨片 c. 腓骨片



4. SK-01火葬骨（手足骨） a. 足骨の指節骨 b. 手骨の指節骨



5. SK-02火葬骨（四肢骨片）

4. 小 結

調査の結果、古墳2基と近世の土壙墓2基、時期不明の古墓状遺構2基を検出した。

1号墳については、主体部中の土師器高杯の時期から古墳時代中期の古墳であることがわかった。内部主体施設が墳丘の大きさに比べて貧弱であることは、市内上乃木町の長砂古墳群においても類例が見られ、同時期の特徴であるとも言えるが、副葬品として直刀、鉄剣を持つなど主体部の有様がそのまま被葬者の地位をあらわすものではないことが考えられる。

9号墳については、主体部中に遺物が存在しなかったため、築造時期や被葬者の性格等不明であるが、墳丘規模が1号墳より小さく、墳丘斜面において須恵器の穂を検出したことから、1号墳より後出で、やや地位が劣ることが推定される。

また、近世の土壙墓を検出したことから、近世においても当地が墓域として認識され、利用されていたことが窺われる。

図 版

1. 上浜弓 1号墳、9号墳
調査前遠景（北方から）

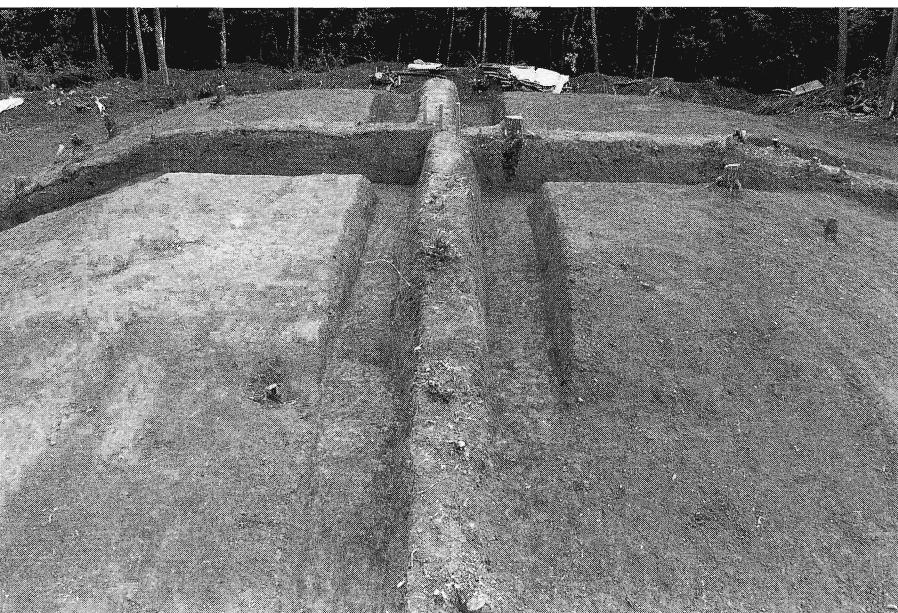


2. 上浜弓 1号墳
調査前近景（西方から）



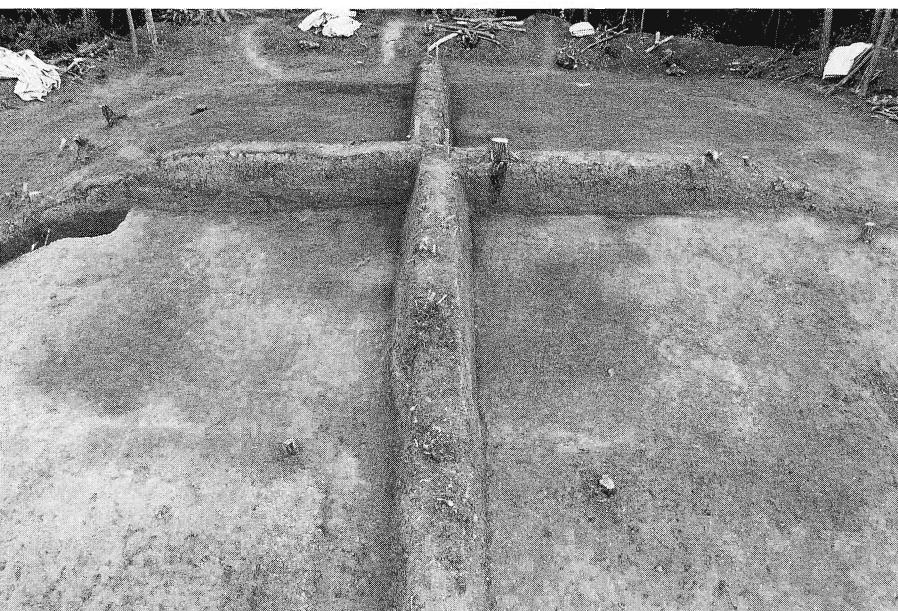
3. 同上（東方から）





上浜弓 1号墳

4. 墳丘断ち割り状況
(北方から)



同 上

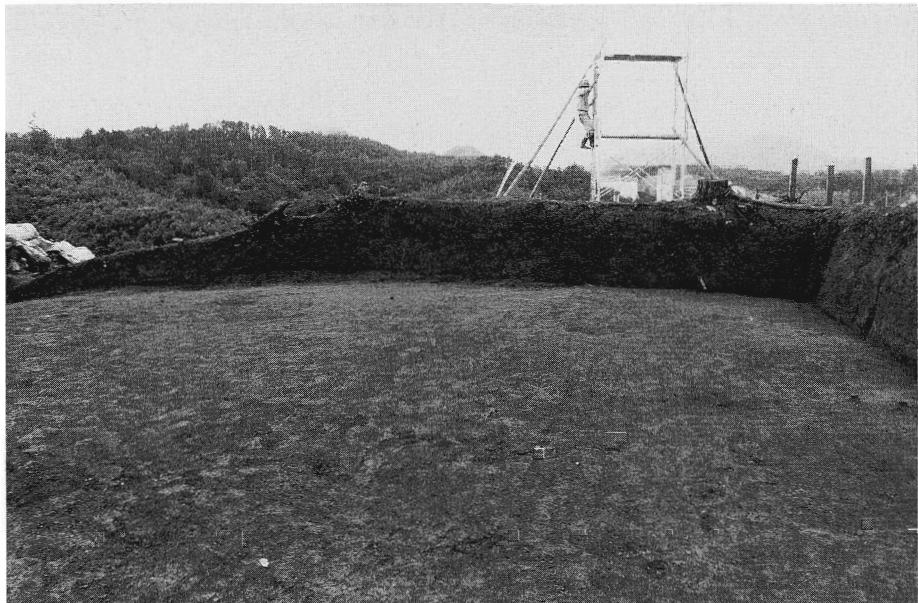
5. 旧表土面検出状況
(北方から)



同 上

6. 東部セクション

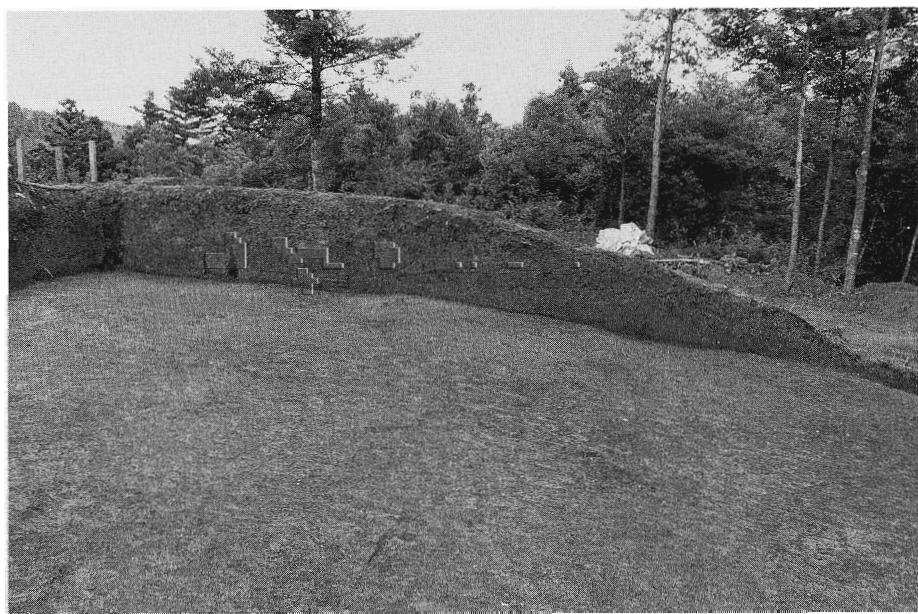
7. 上浜弓1号墳
西部セクション

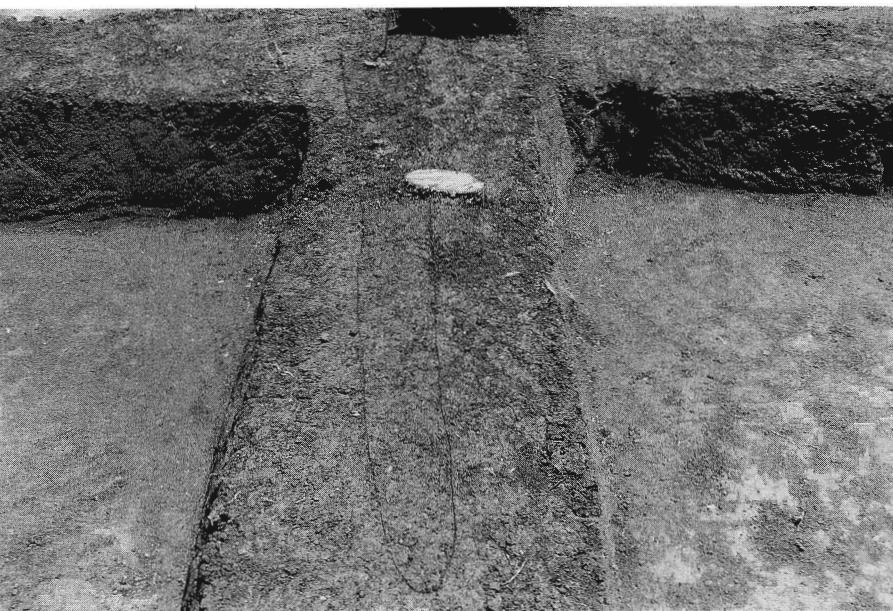


8. 同上
北部セクション



9. 同上
南部セクション

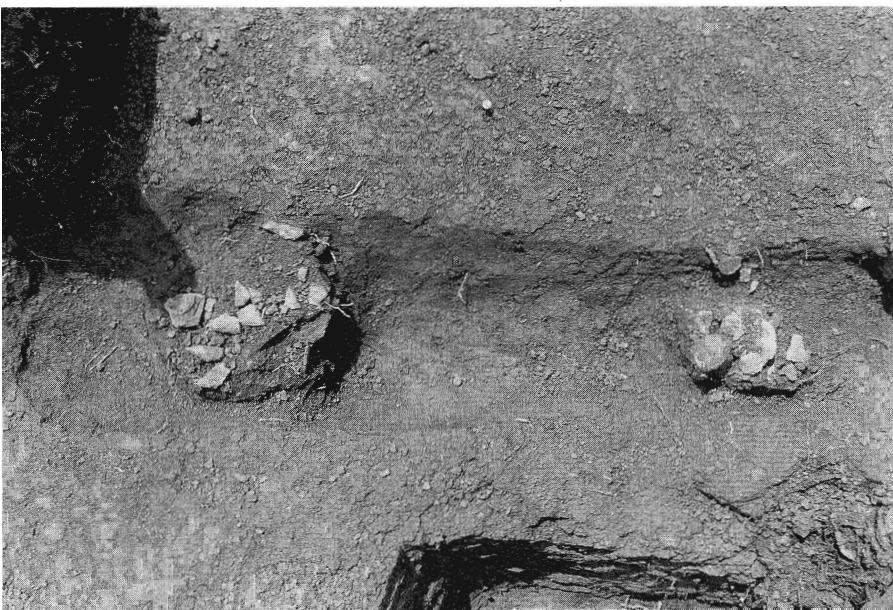




上浜弓 1号墳
10. 主体部上部検出面
検出状況（西方から）



同 上
11. 土器検出状況
(西方から)

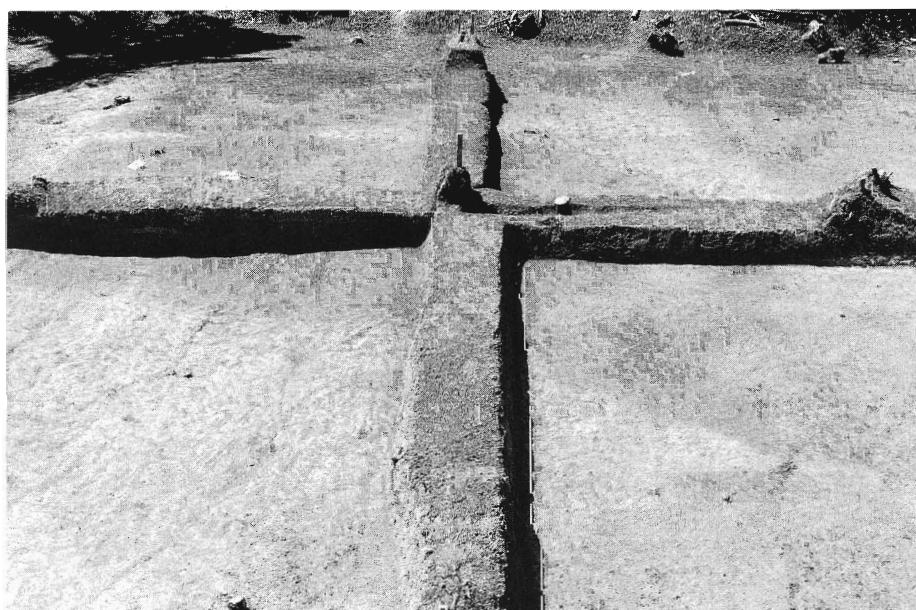


12. 同
近景

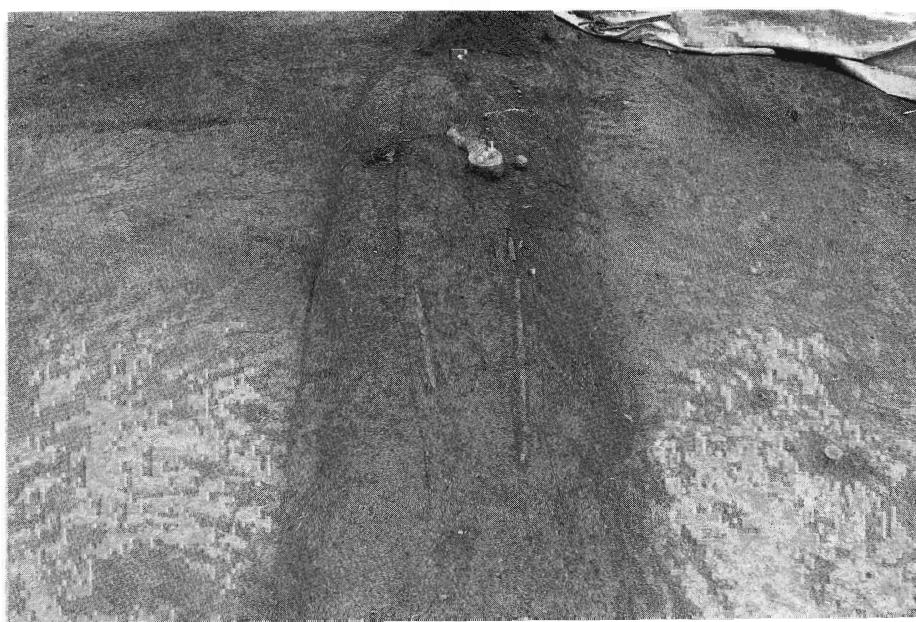
上浜弓 1 号墳
13. 主体部上部検出面
完掘状況（西方から）



14. 同 上
(北方から)



上浜弓 1 号墳
15. 主体部下部検出面
検出状況（西方から）





上浜弓 1号墳
16. 主体部下部検出面
直刀、鉄剣検出状況



同 上
17. 鉄剣近景

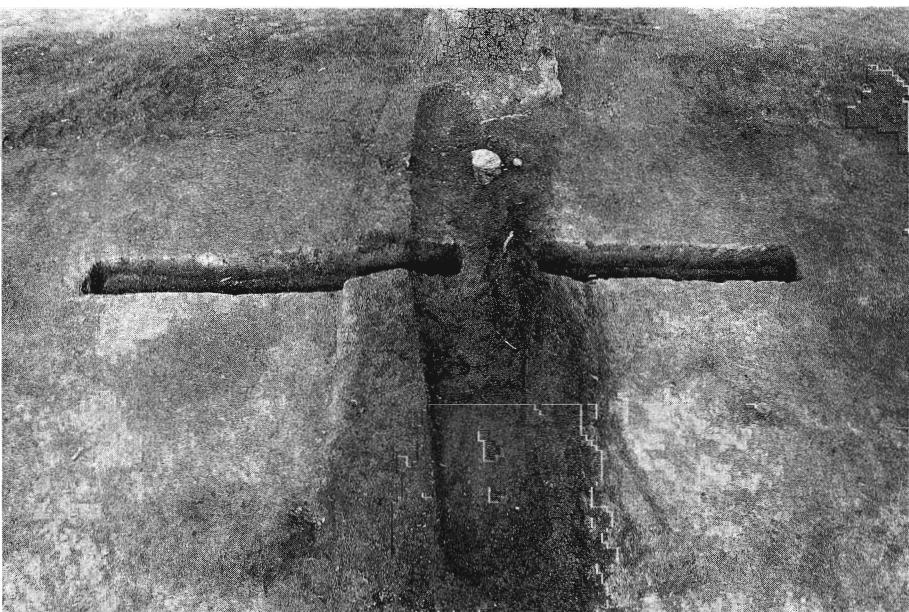


同 上
18. 主体部下部検出面
断ち割り状況（東方から）

上浜弓 1号墳
19. 主体部下部検出面
断ち割り状況(北方から)

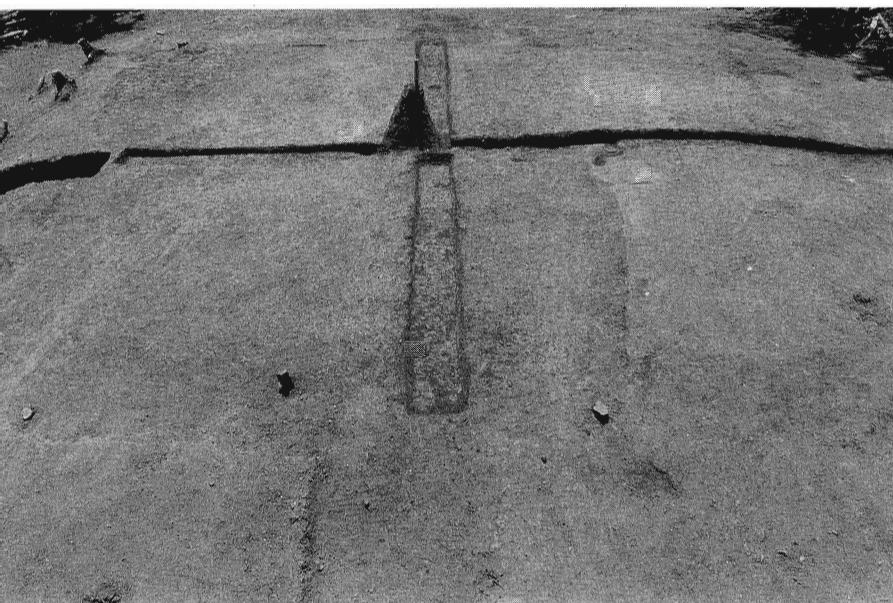


20. 同 上
完掘状況(西方から)



21. 同 上
完掘状況(北方から)





上浜弓 1号墳
22. 旧表土面断ち割り状況
(北方から)



上浜弓 9号墳
23. 調査前近景 (北方から)



同 上
24. セクション (南東方向から)

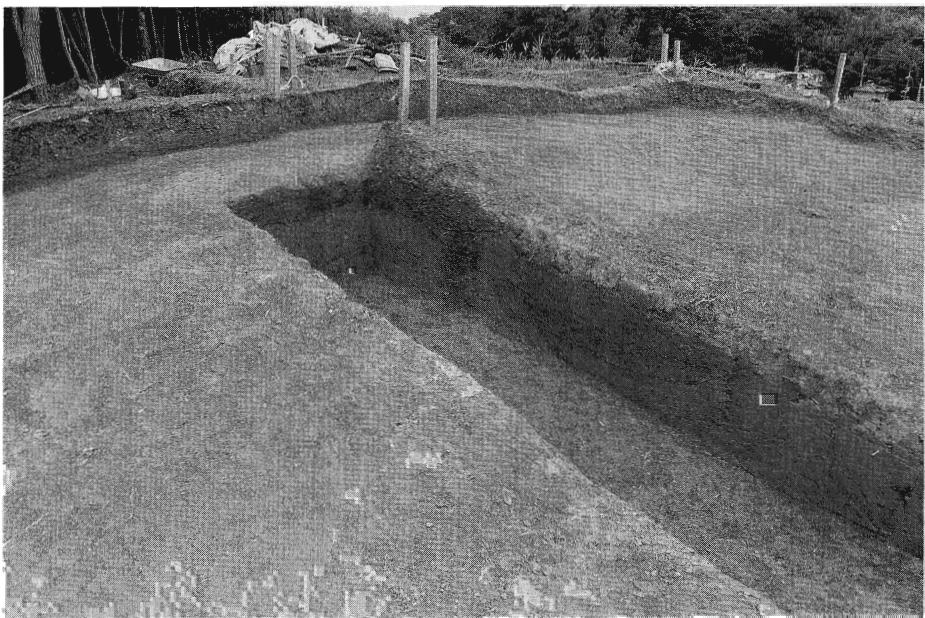
25. 上浜弓9号墳
東部セクション



26. 同上
南部セクション



27. 同上
北部セクション





上浜弓 9号墳
28. 主体部検出状況
(西方から)



同 上
(北方から)



同 上
30. 完掘状況 (西方から)

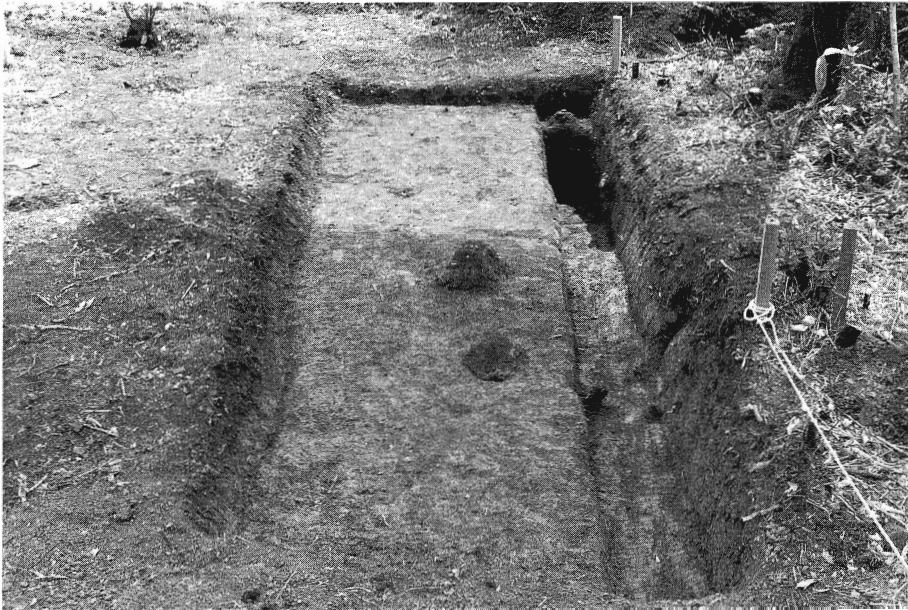
上浜弓 9 号墳
31. 主体部完掘状況
(北方から)



32. 上浜弓 9 号墳
完掘状況 (北方から)



33. T - 1 完掘状況
(西方から)



34. T - 2 完掘状況
(西方から)



35. T - 3 完掘状況
(西方から)



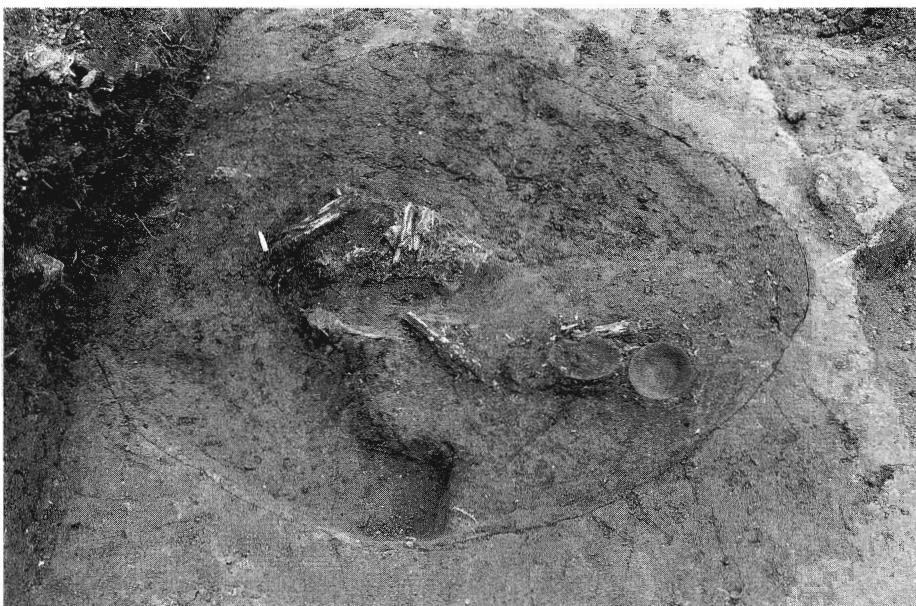
36. T - 4 完掘状況
(西方から)



37. SK - 01
検出状況（東方から）



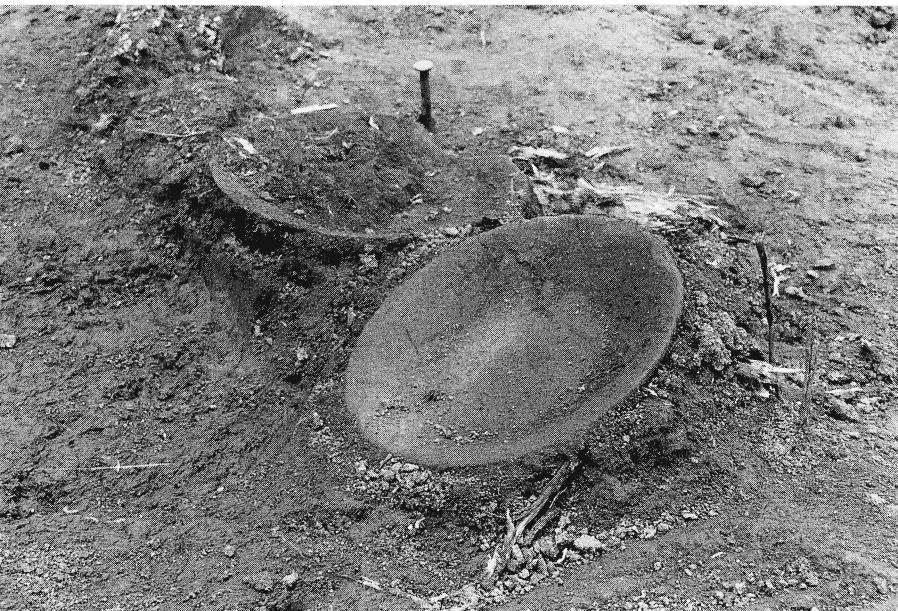
同 上
38. かわらけ、人骨検出状況
(東方から)



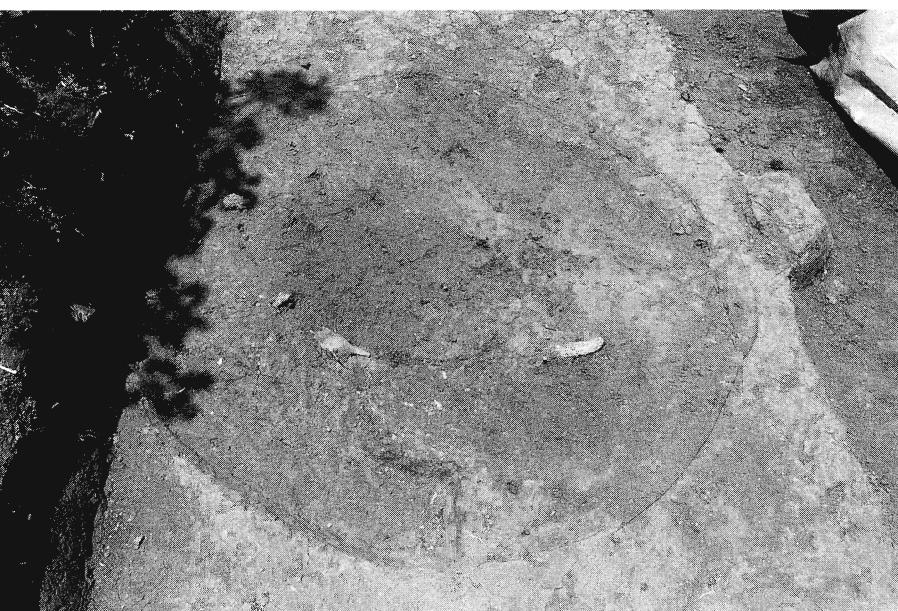
39. 同近
上景



40. SK - 0 1
かわらけ検出状況



41. SK - 0 1
完掘状況（東方から）



42. SK - 0 2
検出状況（北方から）



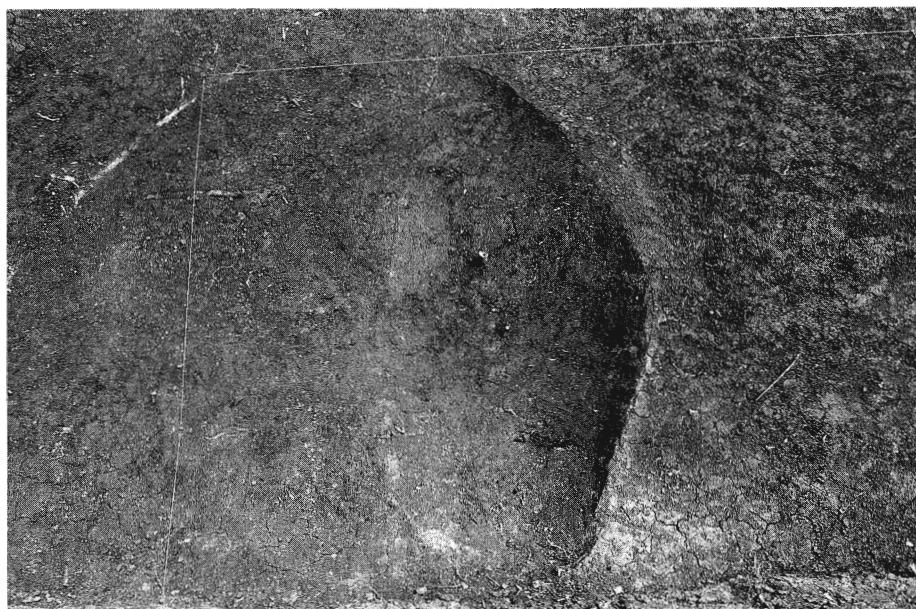
S K - 0 2

43. 人骨片検出状況
(北方から)



S K - 0 2

44. 完掘状況 (北方から)



古墓状遺構 2

45. 調査前近景 (西方から)



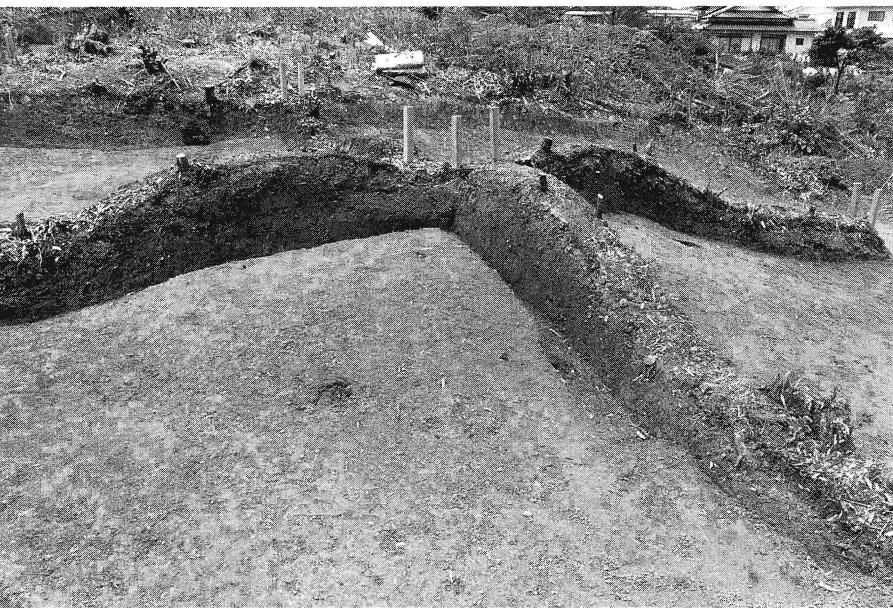
46. 古墓状遺構 2
セクション (北西から)



古墓状遺構 1
47. 調査前近景
(南西方向から)



48. 同 上
セクション (東方から)



49. 古墓状遺構 1・2
セクション（南方から）



50. 古墓状遺構 2
完掘（南方から）



51. 古墓状遺構 1・2
完掘（南方から）



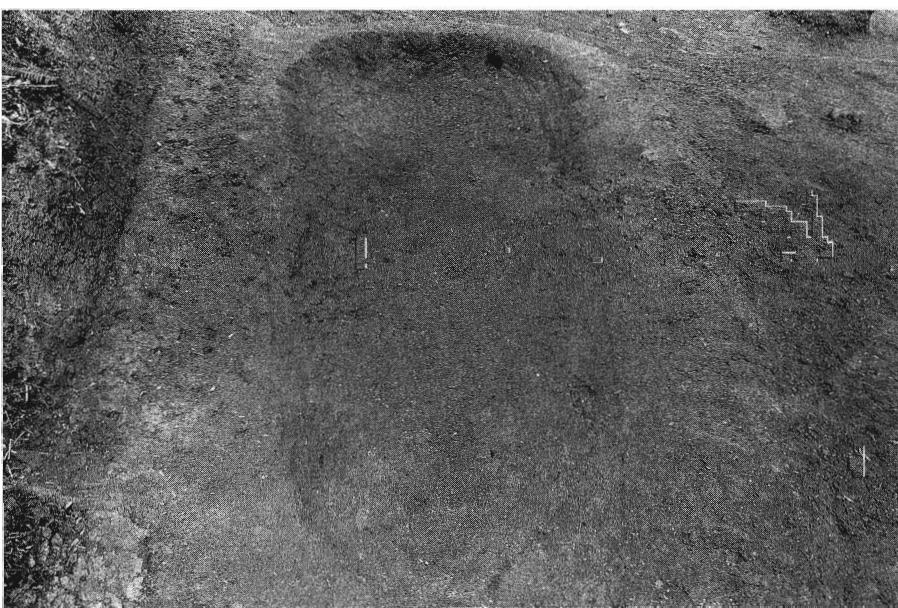
52. SK - 0 3
検出状況 (南方から)

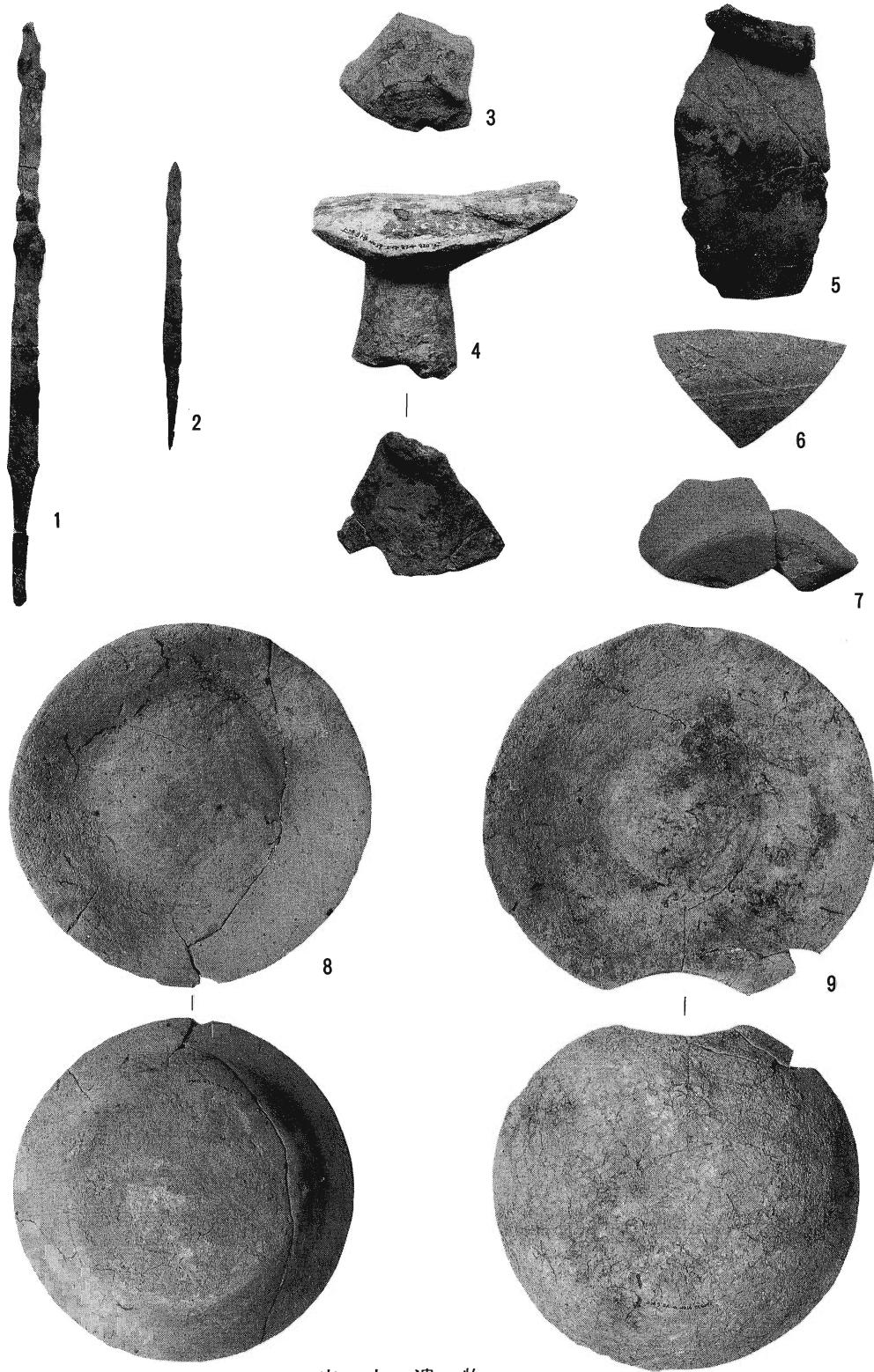


53. 同上
セクション (南方から)

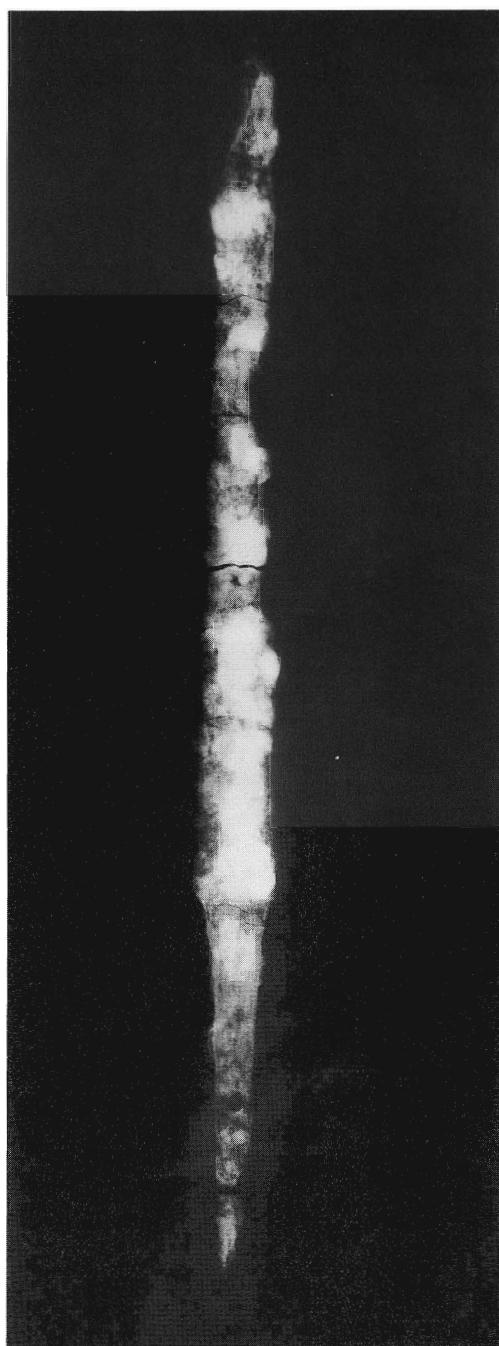


54. 同上
完掘状況 (南方から)

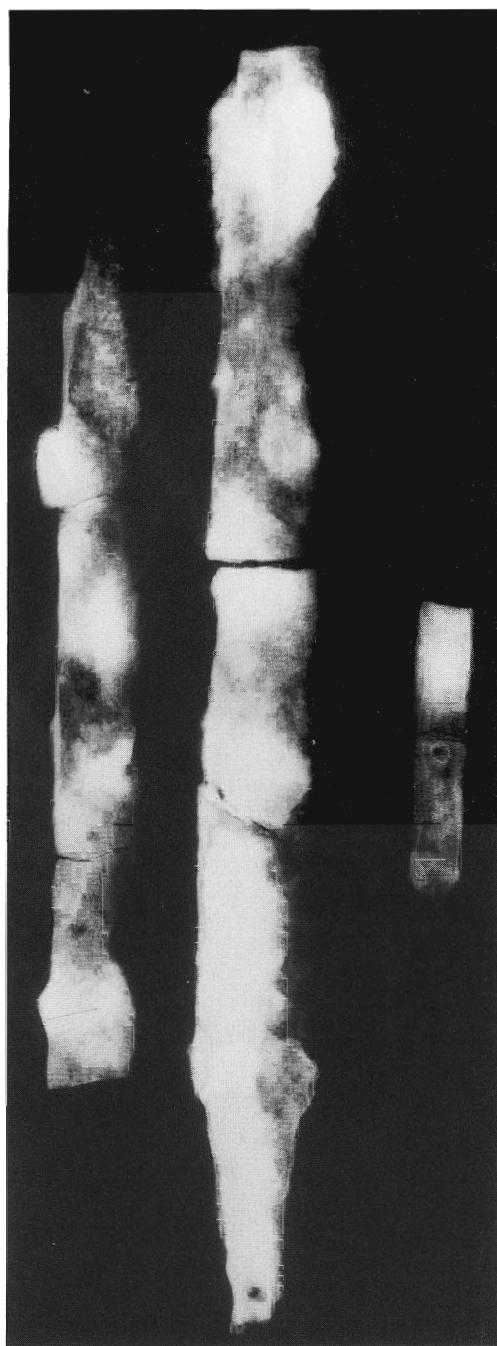




出 土 遺 物



鉄 剣



直 刀

1号墳出土刀剣類X線写真

上浜弓1号墳他発掘調査報告書
報告書

1993年3月

発行 松江市教育委員会

印刷 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89